

---

# 爆炎爆雷のアレン！！

奈倉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

爆炎爆雷のアレン！！

### 【Nコード】

N0547P

### 【作者名】

奈倉

### 【あらすじ】

ここはポケモンだけがすむ世界。この世界のポケモンたちの間では、シャドーと呼ばれる、依頼を只管にこなしていく職業が存在していた・・・

これは、その職業で働く、あるリオルのお話。

# 1 アレン(前書き)

・  
・  
・  
・  
・

第一話からこんな読みにくくなるなんて  
計算外です・・・

それとグロくなってしまいました(r y

ふう、それではどうぞ！

# 1 アレン

「うつ、うつ・・・。」

意識が戻ってきた。目を開くと、天井が映る。見慣れない場所だ。

「・・・？」

横を見る。どうやら自分はベッドに寝ているようだ。ここは・・・誰かの部屋だろうか？

寝返りを打って反対側を向いた。すると、黒い影が。

「・・・！！」

冷汗が頬を伝う。そこには誰かがいた。見たところ男の人。体が真っ黒で、髪は白い。口の辺りは赤いギザギザで覆われていて、目しか見えない。身長は自分の二倍くらいありそうだ。看病をしてくれたのか、ベッドに頬杖についてすやすやと眠っている。でもこの人、どこかで・・・

「ん、んん・・・、ああ、おはよ。」

「ひいっ・・・！！ わあああああああ！！」

叫び声は半径一キロまで響き渡った。

何でこんなことになっているのか。

それは、今から数時間前の話。

## 六年生の春

「ほらほら、アレン、これ以上言うこときかないと、アンタの顔、ぐじゃぐじゃになっちゃうよお！」

アレン、と呼ばれたりオル、彼女は、五年生の時からいじめにあっていた。両親のいない彼女は、奴らにとって最高のおもちゃだった。

顔を血だらけにされるのには慣れてしまっていた。  
憎い。

殺してやりたい。・・・この手で。

今は無理かもしれないけど、いつか強くなったら、お前らを最初  
に潰す。

あいつらが自分の拳で叩きつぶれたら、どんなに気持ちいいこと  
だろう！

そんな事ばかり考えていた。

ある日。

いじめっ子軍団の団長、につっきグランプルのブル子ちゃんが彼  
女にこう言った。

「今日の放課後、屋上に来なさい。」

放課後、約束通り屋上に行った。

待っていたのはいつものメンバー八人＋α。

十数人の女達はアレンを囲んで話し始めた。

「いつもと同じってのもつまんないねえ、リーダー。」

「そうねえ、いっそ楽にしてあげましょうか。」

ブル子の言葉に全員が硬直する。

「そ、それはやりすぎなんじゃあ・・・。」

「こんなブス一匹殺したって、なんてことないわよ。」

そりゃあそうだろう。先生だって私を助けようとしたんじゃないから。

「上等だ・・・」

アレンは立った。

「一度お前らをこの手でめちゃうちゃにしてみたかったんだ。ブル子が笑う。」

「あら、そう。じゃ、今すぐ楽にしてあげる。」

ブル子たちが飛び掛ってきた。アレンはかわしながらブル子に近づき、固めた拳を奴の顔面に思い切り叩き込んだ。

「ぐあああ！！」

そのまま顔を抑えて倒れるブル子に飛び掛り、連続でパンチを打った。その時の彼女の形相は見るものを震え上がらせた。

・・・お前なんか一生許すもんか!!

しかしアレンは、突然背後を襲われ、気を失った。

今までに無い激しい苦しみで、アレンは目を覚ました。

「うっ・・・」

それもそのはず。彼女はたおれていて、首を紐で絞められていた。

「・・・かはっ!」

しかしそれだけではない。腕も後ろで細長い棒と一緒に巻きつけられていた。その棒の先は・・・

「・・・!？」

アレンの腹部に大きな穴を開けていた。辺りがいつもより真っ赤だった。

「うう・・・、うわあああああ!!」

叫ぶと余計に痛んだ。

正面にブル子がいた。手には紐が握られている。

「この紐、引っ張るとどうなるのかなあ？」

首がきつく締め付けられる。開いた口から赤いものが噴出す。

彼女は猛烈な痛みと恐怖に襲われていった。今にも押しつぶされそう。

ブル子が刃物を構えるのが、かすんだ視界の中はつきりと見えた。

「これで、終わりよ。」

アレンは目を瞑った。なんだか心が軽い。

ああ、長い人生が終わった。

よく考えれば、これで良かったんだ。

もう縛られることも無い。自由だ。

父さん、母さん。生まれてから会ったことないけど、顔、分かってくれるかな・・・

サヨナラ、現世の人たち・・・

だがなかなかブル子は来ない。耳鳴りの他に変な音も聞こえてきた。

バチチチチッ！！

そっと目を開けた。そこには見慣れない黒いポケモンが。ぼんやりとした視界でよく見えなかったが、ブル子は首をその人に掴まれていた。おそらく青白い電気も彼が発生させた物なのだろう。

「人の命がどんなに大切か分からないお前は・・・」

低く透き通る声だった。彼は電気を纏った右手を静かに上げる。

「・・・クス同然だ。」



「おい、いきなり叫ぶのは無いでしょ。・・・で、体は？」

「は、はい。大丈夫です。」

「そうか・・・。」

彼は見るからにダークライの姿をしていた。

（うわさに聞いたことがある・・・。ここサンヨウシティでも五本の指に入る使い手の『影万団<sup>シャドー</sup>』のメンバー、「黒い雷」の異名を持つダークライがいると。まさかこの人が？）

アレンは彼の顔をじっと見つめた。

「ん？、どうした？」

「いえ・・・。」

名前を訊く勇気が出ず、うつむいた。布団の間から、自分の腹が見えた。さっきまで穴が開いていたその部分には、傷跡すらなかった。

「あのっ・・・！」

「ん？」

「傷は・・・？」

思い切って訊いた。異常だったからだ。手練の医者でもこんなにきれいに治せないはずだ。なのに、どう見たって医療専門ではない人がこんなに治せるのだろうか。

彼は笑顔で答えた。

「細胞を埋め込んだのさ。オレのを、ね。」

「え・・・。じゃあ、血液は・・・？」

「オレのを輸血した。血液型が一緒だったからな。いや、良かった良かった。」

それは簡単にできることなのか、そうでないのかよく分からなかった。一瞬、自分は大丈夫なのかと思う。

「お、おい、どうした？」

アレンの目からは涙がこぼれていた。

「どうして？ どうしてこんな私を・・・助けてくれたんですか！

？ いままで十二年間生きてきて、貴方のように私を助けてくれて・・・、看病までしてくれる・・・、そんな人いなかった！ なのに・・・こんな醜い私を・・・！」

彼女は声を荒げた。

彼は笑ってそのすらりと長い漆黒の手をアレンの頭にぽんと置いた。

それだけだった。

「お前、なかなかバトルのセンスあるよ。」

「はあ。」

「それにオレと同じ雷の波導のニオイがする。」

「？」

波導とは全ての生き物の生命エネルギーの事で、場所によっては気とか、オーラとか言われている。ポケモンにも勿論存在し、また、他の生き物より波導の属性がハッキリしているのが特徴で、技や、能力にも大きく関わっている。普通波導の属性はポケモン本来の属性と一致するものなのだが、彼が言うには、アレンは雷属性の波導と炎属性の波導を持ち合わせているらしい。

「そういや、まだ名乗ってなかったね。オレはカガリ。お前は・・・？」

「アレンです。」

「・・・アレン、影万団シャドーに入らないか？」

「え・・・！？」

突然の誘いにアレンは驚いた。影万団シャドーなんて、エリートに行くところ。彼女にとっては天の上の人々の話である。

「そんな・・・、私、何も知らないし、・・・。」

「仕事の内容は依頼にもよるが、お前ならきつとこなせると思うよ。」

彼、いやカガリは青く透き通った目で、真っ直ぐアレンを見ていた。  
・・・嫌な予感しかないのは、気のせいだろうか。

そうして、彼女の過酷なお仕事生活が幕を開けるのである。

## 1 アレン（後書き）

思ったよりストーリーが進んでいない・・・（汗

ア..まだ私仕事についてないですね・・・

カ..さあてと、明日からお前をビシバシ鍛えていくからね♪

ア..カ、カガリ先生、目が・・・！！ 作者さん、どうかしてえ！！

ってな訳で次回は仕事と特訓のお話ですう♪

ア..なんか華麗にスルーされたよーな・・・

## 2 入団（前書き）

いよいよお仕事に就職します！

ア..ところで・・・先生はいくつなんですか？

カ..んゝ、今年で24になるかな。

ア..・・・（思ったより歳だ・・・汗）

ちなみにね・・・アレンちゃん、カガリはね・・・・・・・・（コシヨシヨ）

ア..ええゝっ！！ カガリ先生って、大人だからって18禁読んでホイホイしてるひとだったんですかあああ？！

カ..・・・悪い？

ア..だから私を連れてこんな密室へ・・・！？

うわああああ！！ もう私この家出てくっ！！

（泣

カ..それは誤解だア！！

## 2 入団

「嫌なら無理に言わないけど・・・」  
誘いを断ったアレンにカガリは言った。

「お前、明日から学校には行けないよ。」  
はい・・・?!

「それはどうして・・・。」

「オレが頼んだ。退学にしてくれって。」

はあああああああ??!!!

「んじゃ何をすれば・・・」

言いかけてアレンは言葉を止めた。カガリはにっこり。

「「シャドー」」

二人の声は見事にハモった。

そうして強引に入団させられてしまった。

「では私は帰ります。」

住所に名前などの個人情報を一通り言った後、アレンはカガリに頭を下げ言った。

流石に泊まるわけにはいかない。私にだって家はある。それに、私を助けてくれた上に治療も施してくれたカガリさんに、これ以上迷惑をかける訳にもいかない。

「ん、じゃあ、送るよ。ちなみに・・・入団書はマメパト便で送ったからな。」

という訳でカガリとアレンは共にアレンの家へ向かった。  
しかし。

「オレがついてきて正解だったな・・・。」

カガリが呟く。彼女の一軒家は、最早家とは言えない物になっていたのである。

「ん、今急に寒気が・・・。ま、気のせいかな。」

壁や屋根が粉々に粉碎され、家は潰れている。アレンは膝をついた。悲しすぎると涙は出てこない、と誰かが言っていたが、今まさに彼女はその状態であった。

「これも奴らの仕業・・・？」

「おそらく、ね。退学になったのを知ってやったんだろう。」

実はカガリが学校へ向かうとき誰かに付けられていた。無論彼は気づいてはいたが何もしなかったのである。

（あのとき始末しておくべきだったか・・・。）

今更後悔しても遅い。とりあえずここはオレが責任を取るべきだと彼は考えた。

「・・・。」

カガリはアレンに背を向けしゃがみ込んだ。

「・・・？」

アレンは彼の奇妙な行動に顔を上げる。

「乗れ。お前もう、歩けないだろ。」

カガリの決心は、とうにしていた。

本当に申し訳ない。なんと言ったらいいいのかわからない。アレンは夕食を作る彼の後姿を見ながらずっと考えていた。赤の他人であ

る私に、こんなに優しくしてくれる人は初めてだ。

彼女の心臓の鼓動は、さっきから早くなっただけだった。理由は単純。

カガリが他人、しかも男性である事。

当たり前だが彼女は彼と生活を共にする事に抵抗を感じていた。人を信じる事を忘れた彼女は、彼を信用していない。

その気になれば私を殺す事も簡単にできる。

彼のあの笑顔が偽物のようで、単に怖いのである。

(そういえば・・・)

アレンは彼の後姿を見て、ふと気づいた。

その視線の先には、カガリの左腕。

彼は何故か左腕に包帯を巻いていた。

怪我をしているようには見えない。料理をしている時、彼は左腕を起用に操っているが、顔には苦痛の色など全く無い。隠しているようにも見えない。

(深追いはやめよう。)

彼女は目を瞑ってため息をついた。

そのとき。

ピンポン

突然ベルが鳴った。

誰だろう？



カガリは調理する手を止めた。

「オレが出るよ。」

ドアが開く。出てきたのは、あしながポケモンのアリアドスだった。この辺では見慣れないポケモンだ。カガリはため息をついた。

「はあ・・・、こんなに早く来るとはね。キガル。」

「これは失礼しました。しかし、上からのご命令だったもので・・・。」

どうやらカガリと知り合いのようだが、話が全く読めない。

「・・・、で、やるの？ もう暗いけど。」

「はい。」

カガリはこちらを向いた。話の流れ的に、自分が大きく関係しているのには違いない。

「紹介する。シャドーの一員、キガルだ。彼は主に試験官として働いている。」

「・・・、はじめまして。」

挨拶をすると、キガルは一礼した。

「貴方が新入りさんですね。こんなお時間で申し訳ないのですが・・・。」

嫌な予感が脳裏をよぎる。

シャドー、

試験官、

『こんなお時間で申し訳ないのですが・・・』。

「これから僕と戦ってもらいます。」

「!？」

問題発言だが彼は本気のような。青紫の目がぎらっと光る。

「そういうことだ。ま、頑張れ♪」

彼は笑顔で言うがちっとも安心できない。むしろ今はうざったく見

える。

だがアレンはこの勝負を受け入れる事にした。

理由は2つ。

この試験こそ、シャドーへの入り口。という直感的な予想。

それと、彼女は比較的、気楽な性格だったのである。

## 2 入団（後書き）

キガルの登場です♪

キ..どうも。

ちなみに歳はいく.....

ア..もうやめてくださいっ!!..!

### 3 キガルvsアレン(前書き)

ふう、やっと第3話・・・

カ..おい作者、お前気づいてるのか？ 前回ギャグ使ってただろ！

あれ結構寒かったんだぞ！

あれ、気づいてましたあ？

ア..えっ！ 何々？ 何のこと？

カ..とりあえず、もうギャグは使うな！

了解です・・・

ア..話について行けない・・・

### 3 キガルvsアレン

サンヨウシティの北東には、夢の跡地というエスパークタイプのポケモンが多く生息する工場の跡地がある。周りも木々で囲まれており、激しいバトルをしても周りに迷惑はかかりにくい。

キガルはそこで勝負をしようと言った。

アレンは少し心配になってきた。

夢の跡地は昼でも太陽の光があまり入らず薄暗い。

夜となればさらに周りは見えにくくなる。

こんな視界の中バトルして勝てるだろうか。

相手は見たところ、暗闇の中でのバトルには慣れていそうだ。

しかし私は慣れていない。

もし万が一相手も見えていなかったら・・・

気づかず私の心臓をざっくり・・・

何てこともあるかもしれない。

アレンは首を振って想像をやめた。そして、目の前を歩くキガルを真っ直ぐに見つめた。

「着きました。それでは始めますよ。」

彼らは工場の跡地内でバトルをする事にした。工場と言っても、も

うコンクリートの柱が僅かに残っているだけで、上からは月の光が差し込んでいた。確かに少し暗いが、相手の姿ははっきり見える。

「・・・、ハイ！」

キガルはその返事を聞くと、真っ直ぐこちらに走ってきた。

ポケモン

人というのは、着いてくるなといわれたら、着いていきたくなくなるのが心理である。

という訳で、暗黒ポケモンの彼は、2人の後をコッソリ付けて来ていた。

（キガルの奴・・・こんな所でバトルなんて、ねえ・・・。）

正直に言っているとアレンが心配だったのである。

どうもおかしい。

バトルを無理に今日しなくたっていいのに。

それにオレに、着いて来るな、何て言いやがって。

アイツ、もしかしたら本気で・・・

（ま、頑張れよ、アレン・・・。）

彼は建物の影に身を隠した。

「『ナイトヘッド』！」

キガルの目から黒い光が放たれる。アレンは跳躍してかわす。

「『ブレイズキック』！！」

アレンは左足に意識を集中させ、炎を纏った足でキガルの額を蹴った。

「うわあああっ！」

キガルは額を押さえ、後ろに下がる。どうやら火傷を負った様だ。

（流石ルカリオの進化前、波導エネルギーのコントロールがよくできている。それに、炎技が使えるなんてね。こりゃ、勝負が分からなくなってきたぞ・・・）

2人を見守るカガリの左目は、通常のダークライとは明らかに異なる、赤い光を放っていた。

「くっ・・・。」

キガルが怯んでいる隙に、アレンは、波導眼を開眼させた。

波導眼とは、ルカリオやリオルの一族が持っている特殊な瞳の事で、相手の波導を見る事ができる。アレンの瞳は、菱形ダイヤモンドを模っていた。

「今だ、『気合球』！！」

アレンは手に神経を集中させ、オレンジ色の球体を作り、キガル目掛けて投げた。

「ぐうあっ！！」

毒、虫タイプを持つキガルには格闘技は薄効果だが、気合球は威力も高く、相当なダメージのようだった。

（ガキのくせに、生意気なっ！！）

キガルの瞳が紫色に光った。

「『サイコキネシス』！！」

キガルが首を振り上げると同時に、アレンの体が浮いた。

「何っ・・・！ うわっ！！」

ドガアアアン！！

アレンはそのまま投げ飛ばされ、コンクリートの壁に叩きつけられた。その姿を見届けると、キガルは恐るべきスピードでアレンの方へ走った。

（キガル、冷静さを失っているな……。これじゃアレン以下だぞ……。）

立ち上がろうとしたアレンの上にのしかかり、前足をアレンの腹に突き刺した。

「『毒突き』！！」

ドシュツ

「ぐあああああっ！！」

キガルは突き刺した足を離し、間合いを取った。アレンは立ち上がるが、視界が歪む。

（……。毒にやられたようだな……。）

カガリが目を細める。

「どうしました？ 来ないなら、こちらから行きますよ！！」

キガルは前足に波導を集中させる。アレンの目には、その動きが見えた。

「……。流石3EP先輩が選んだポケモンだけはある……。」

キガルは独り言のように呟いた。



(あれ・・・?)

アレンは後ろを向いた。キガルが何か呟いた瞬間、後ろから強烈な殺気が現れたのである。しかし後ろには誰もいない。

(キガルさんは・・・なんて言ったんだろ？ 確か・・・3EPとか・・・)

キガルがこちらに近づいているのが分かったアレンは、考えるのを止めた。

「ここで攻撃をすれば相打ちかな？」

そういいながら左足に神経を集中させる。

(やれやれ。これ以上やったら二人とも倒れるぞ・・・。仲裁役は好きじゃないんだが、ここはオレの出番かな・・・。)

カガリは両手を伸ばした。左右の手から黒い光が放たれる。

(『黒竜相殺』!!)

今まさにキガルの毒手とアレンの炎足が交わろうとしていた。

「おおおおおお!!」

「はあああああ!!」

しかし突然動きが止まる。2人の体は2匹の黒い竜に巻きつかれていた。

驚く2人の前に、ボウンと音を立てて煙と共にカガリが姿を現した。

「そこまで。」

「・・・カガリさん!!」

アレンは目を疑った。キガルは静かに舌打ちをする。

「お前ら、やり過ぎだ。特にキガル。」

カガリは細い目でキガルを睨む。何故か彼の左目は赤い光を放ち、瞳は菱形を模っていた。

「なっ・・・! 先輩・・・その目は・・・!」

「・・・キガル、お前がアレンに何をしようとしたのかは知らないが、熱くなりすぎだ。それに・・・」

カガリは怯えるキガルを、殺気を放つ目で睨みつけた。

「オレをもう、あの名前で呼ぶな。」

「さあて、遅くなったが夕飯だ。キガル、お前も食ってけ。」

3人は夜の闇を歩いていった。そういえば先程から何も食べていない。

「ボクは結構です。では。」

そういつて彼は突然消えた。

「?!」

「『高速移動』だ。きっと本部に向かったんだ。お前が正式に入団したからな。」

「そうかあ・・・。」

とは言っても実感が沸かない。

「うん、やっぱりお前、バトルの才能があるな・・・。よし、明日からは特訓だ!」

ええっ!

「そんなあ、何するんです? カガリさん。」

「さんじゃない! オレの事は先生、と呼べ!」

「はあ?!!」

不満げにカガリの顔を見るアレンを、カガリは笑った。その左目は、いつもの青色に戻っていた。

（こいつを、守っていかないとな・・・・・・。）

春の夜の上空には、満月が輝いていた。

### 3 キガルvsアレン（後書き）

いろいろ謎残してますがここまでです。

ア…なんか気になるな・・・

次回はカガリの外伝！っていいたいところなんだけど、まだまだ先になりそう。

ア…ええっ！ 何でさ？

まだ第3話なのに外伝ってどうよ？

ア…まあ、そうだけど・・・

という訳で読者の皆さん、また次回！

カ…ま、オレにもいろいろあったんだ♪

ア…最後の音符止めて下さい（怒

#### 4 カガリ班集合！（前書き）

今回は新キャラが登場します！

それではどうぞ！

## 4 カガリ班集合！

「わぁ、広いところ・・・！」

「ん、お前、ここは初めてか？」

「はい。」

カガリとアレンは、イッシュ1の娯楽都市、ライモンシティを訪れていた。

「おかしいな。集合場所はここの筈なんだが・・・。」

「うわぁ、あれってもしかして、観覧車って奴かな？」

アレンははじめて見るものに目を輝かせ、カガリはため息をついて頭を掻いた。

「こんにちは！」

「「？」」

突然背後から声がして、2人は後ろを向いた。

そこには炎ポケモン、ブースターが笑って座っていた。

「あなた方、もしかして、第10班の方々ですか？」

「ああ。お前も？」

「はい。ボクはポエル。ホドモエから来ました。」

「随分遠くから来たんだな・・・。オレはカガリ。こちらはアレンだ。」

ポエルは声は高かったが口調的に男の子だった。

「ボク、まだ新入りで・・・。ランク7級なんです。」

彼はうつむいていった。カガリは笑って答える。

「それはこいつも同じだ。お互い、仲良くやろう。」

カガリの笑顔に安心したのか、ポエルは満面の笑みを浮かべた。

「はい！ よろしくね！ アレン君！」

・・・え・・・  
アレン、君・・・？！

それまで笑顔だったアレンの顔が引き攣った。

「・・・ゴメン、こいつ、女の子だから。」

カガリが苦笑しながら答える。

「え・・・？ そうなの？ あはは、ゴメン♪」

アレンは苦笑しながら、心のデスノートに『ポエル』と書いた。

「へえ、随分弱そうなメンバーだな、1人以外は。」  
3人の後ろに一匹のブイゼルが立っていた。声的にこいつも男の子のようだ。

だが余りにひどい言葉だったので、皆表情を曇らせる。

「俺はライオ。ちなみにランク2級だ。」

ランクとはシャドーでの所謂レベルのような物で、一年に一回行われる試験を受ける事により進級する。アレンは昨日入ったばかりなのでまだ7級だが、ライオというアレンと同じくらいの少年は2級であった。

「カガリ、あんたがいるなら今回の任務は安心だな。」

アレンとポエルの事は眼中に入っていないような言い方だった。

「・・・そうだいいけどね。」

カガリは苦笑した。

（先生って、そんなに強い人だったんだあ・・・。）

アレンはカガリが有名である事に誇りを持った。

「さあ、今回の任務は、と言いたいところんだけど、その前に、ちょっとお前らの実力ってもんを見せてもらおうよ。」

第十班ことカガリ班は、ライモンシティを少し離れ、迷いの森に移動していた。カガリに全員が注目している。

「今から、オレと鬼ごっこをしてもらう。」

「?!」

突然カガリの口から幼稚な言葉が出てきたので、アレンとポエルは目が点になった。ライオはというと、ふうっとため息をついて腕組みをした。

「お、鬼ごっこって・・・、何をするの？」

ポエルが尋ねる。

「簡単なこと。オレが逃げるから、三人は鬼になって、オレを追いかける。オレが捕まった時点で終了だが、制限時間はお昼までだ。」  
タイムリミット



カガリが腰に付けていたポーチからストップウォッチを取り出し、  
12時にセットした。

「あ、言い忘れたが・・・、捕まえられなかったらお昼抜きな。それじゃ。」

「あ・・・、ちよっ・・・！」

顔を上げたときには、そこにカガリの姿はなく、ただ深い森が広がっていた・・・。

#### 4 カガリ班集合！（後書き）

・・・さて、今回は鬼ごつこととなります。

ア..なんか変なの・・・。

ちなみに、オリキャラ募集してます！

感想とかの所に、キャラの名前、出身地、特徴を書いてください♪

ア..特徴の所には口癖とかも書いてくれ！

ポケモンと出身地は何でもどこでもかまいませんので！

送られたオリキャラは本編に登場させます！

全てではありませんが・・・

という訳で応募待ってます♪

## 5 波導眼（前書き）

遅くなりましたが第五話です☆

今回はいじめについてです

それではどうぞ！

## 5 波導眼

「どうするんだ？ そのリオルのガキ。」

ライオが睨みつけてきた。相変わらずこの人は冷たい口調だ。

「好きにすればいいと思うよ？ ってゆーか、ランク、アンタよりも私下なんだからアンタが決めれば？」

そしてアレンも彼の態度に切れ気味だった。

「フン……。」

そういい残すとライオは森の中に消えていった。

「ポエル、行こうか。」

「おう！」

そしてアレンたちも歩き出す。

「見つかるかな？」

ポエルは首をかしげる。どうやらかなり不安のようだ。

「……。」

アレンは黙って波導眼を開眼させた。

「ねえ、ほんとにこっちであってんのか？」

アレンたちは森の中を真っ直ぐ進んでいった。歩き始めて30分が経過している。

「ああ。間違いないよ。この辺りからカガリ先生の波導が漂ってる。」

アレンは薄暗い森を見つめ、只管歩いていた。

（にしても先生の波導、黄色いけど黒いのも見える……。何でだろ？）

考え込んでいると、ポエルがアレンの顔を覗きこんできた。

「ああ〜っ！ それって波導眼？！」

「・・・そうだけど。」

ポエルの目がキラキラしている。

「っすごおい！ 波導眼って、ルカリオ一族でもめったに開眼できないらしいよ？ いつ開眼したの？」

アレンは一瞬顔を顰めたが、空を見上げると、静かに口を開いた。

「・・・昔、私がいじめにあっていた頃の事なんだ・・・。」

ブル子率いるいじめっ子軍団の標的は、ターゲットアレンだけではなかった。

それは、とある日の下校途中・・・。

その日は珍しく例の呼び出しが無かった。しかし事件が起こった。アレンが帰っていると、女の子の物であろう悲鳴が聞こえてきたのだ。

「きゃああああっ！！」

アレンはランドセルを投げ出し声のほうへ走った。

「誰か！ 誰かたすけてえ！！」

「馬鹿ねえ。誰も来ないわよ。」

そこは体育館だった。いじめっ子達の間から、彼女の姿が見えた。

（あれは・・・、同じクラスのみあさん・・・？）

エネコのみあだった。いつも尻尾にリボンをつけ、元気いっぱい女の子の・・・のはず・・・。

「きゃあっ！！」

みあの顔にブル子はキックを食らわせる。

「きゃあきゃあ言ってるじゃないわよ！ このぶりっ子！」

周りから、そうよそうよと声が聞こえる。そのうちの一人、ブニャ

ツトのリンカが前にのりだした。

「あんたのその態度むかつくのよ。可愛く思われないからって・・・！そのおかげでシュン君にふられたんだからっ・・・！アンタなんか、呪ってやるわ！」

ミアは言い返そうとするが痛みで声が出ない。

「リーダー、あたしが殺ってもいい？」

「まかせるわ、リンカ。」

リンカは返事を聴くと、笑みを浮かべミアに近づく。

（あいつ等・・・！ 許せない！！）

「これで終わりよっ！ミア！」

リンカは腕を振り上げ、『切り裂く』を発動させる。

（ああっ・・・もう、だめ・・・！）

ミアは目をぎゅっと瞑った。

「あきらめるな！ まだ死んじゃだめだ！」

ミアが目を開く。そこには、リンカの腕を受け止める、見覚えのある姿が。

「アレン・・・さん・・・？」

「この目は、そのとき開眼してたんだ。一年前の事だけど。」

アレンは笑いながら頭を掻いた。

「へえっ！ すごいなあ。で、そのミアちゃんは何？ その後どうなったの？」

アレンは俯いた。

「? どうしたの?」

「・・・・・・。」

アレンの目に涙が浮かぶ。

「・・・・まさか・・・・・・?!」

「・・・・あのあと・・・リンカが私に攻撃をしてきて・・・・、かわし切れなくて・・・・そして、もうだめだと思っただ・・・・ミアが目の前にいて・・・・庇ってくれたみたいで・・・・。」

「死んじゃった、のか。」

「うん。」

2人は黙り込んだ。

「ゴメンな。悪い事訊いて・・・・。」

「ううん・・・・。いいんだ・・・・。・・・・?!」

アレンが突然顔を上げる。

「・・・・!!」

アレンは走り出した。ポエルも慌ててついていく。

「どうしたんだ、アレン!!」

「ライオが危ない!ライオの波導がつ!!」

二人は森の中を奥へと駆けていった。

## 5 波導眼（後書き）

ポ..波導眼って、どんな風に見えるの？

ア..周りが白黒になって、波導だけ色が着いて見えるんだ。

ポ..へえ、じゃ、カガリ先生は何色？

ア..黄色と黒。

ポ..そのイタチ野郎は？

ラ..なんだと?!（怒

ア..水色。

ポ..へえ、波導の色ってなんだかタイプに似てるんだね♪  
じゃあ、ボクは何色？

ア..なっ・・・！ 緑に・・・見える・・・?!

ポ..えへへ♪

え、何で緑かって？その秘密はまた次回♪



## 6 無敵の左腕、プリズムアーム発動！（前書き）

第6話です。

カガリのもうひとつの能力が炸裂します！

## 6 無敵の左腕、プリズムアーム発動！

アレンとポエルがついた頃には、二人のバトルが始まっていた。

「えっ。あれちよっと、ライオじゃない？」

「ああ。だけど・・・。」

アレンの目には、ライオの姿が真っ黒に映っていた。

（・・・これはまずいな・・・。）

ライオの『かまいたち』をかわしながら、カガリは目を細めた。彼の左目にも、ライオが黒く映っている。

「うおおおおおおおっ！！！！」

「少しは落ち着け！」

カガリが『ダークホール』を放つも、ライオは跳躍してかわす。

「大人しく・・・捕まっとけえっ！！！！」

ライオが『水の波導』を打つ。

「くっ・・・！ 『雷』！」

水と電気がぶつかり、辺りは水蒸気に包まれる。

「仕方ない・・・。この力は使いたくなかったんだが・・・。」

カガリは左腕に巻いていた包帯を解き始めた。

「?!」

彼の左腕に、異様な紋様が浮かんでいた。

「あっ・・・！あの腕は・・・！」

茂みに隠れていたポエルが身を乗り出す。

「どうした？」

「ほら、見える？ あの変な模様！」

カガリが露出した左腕には、‘目’をイメージさせる、不気味なマークが刻み込まれていた。

（七色の波導・・・。）

カガリの左腕は七色に輝いていた。

「あれ、間違いないよ！ 『プリズムアーム』だよ！」

「はあ？」

ポエルは興奮していた。

「ボク達イーブイ一族には、こんな言い伝えがあるんだ。ボク達の一族は、かつて、実験体として、利用されていたんだって。そしてある組織が、イーブイとその進化系を集めて、波導を全部抜き取って、ひとつの塊を作り上げたんだって！」

「?!」

波導を全部抜き取られる、という事は、すなわち、‘死’を意味する。

ポエルは、拳を強く握ったまま、話し続けた。

「それで、あるポケモンに、流し込んだって訊いてたけど・・・、まさか・・・カガリ先生だったなんて！・・・それで、波導を全部抜き取っても、死ななかったブラッキーが、ボクを産んでくれたんだ・・・。」

（ポエル・・・。。。。お前・・・。）

カガリの波導が、急に赤色になった。そして腕の模様も、黒から赤へ変わる。

「・・・何だ?!」

「赤くなったから、ブースター能力を発動させる気だ！」

「何、ブースター能力って!?!」

「炎だよ！ かなり波導を消耗するけど、灼熱の炎が放てる！」

「『赤竜白蓮』!!」

カガリの腕から白い炎の竜が現れた……。

「カガリ先生ー!!」

「ん、アレンにポエルか。」

「ライオは……?」

「今は気絶してるが、怪我也軽いし、大丈夫だ。」

カガリの左腕は、もう包帯に包まれていた。波導ももとに戻っている。

「……あの。先生……。」

ポエルが涙ぐんでいる目でカガリを見つめる。

「……。」

カガリもポエルの目を見つめた。アレンは、その目に、悲しみ、という名の波導を感じた。

「ん、そろそろ任務の説明をするよ。」

カガリは背を向けて歩き出した。

## 6 無敵の左腕、プリズムアーム発動！（後書き）

ア..謎だ...。

ポ..作者さん、早く外伝書いてくださいよ！

んゝ、もう少しかな♪

つかポエルの波導の秘密を書くの忘れてたっ（汗

ポ..いつか書いてよねっ！

## 7 コンビネーション(前書き)

今回は新キャラのお話です♪

アレンたちは出ないよ

ア…ええっ！

## 7 コンビネーション

「・・・なあレイ。ここでもいいんだよな？」

「ああ、間違いないよ、ライ。俺達の今回の依頼は、ここの守護なんだから。」

「タワ―オブヘヴン、かあ。気味悪いな・・・。」

霧がかった灰色の塔の前に、2匹のポケモンが立っていた。

シャドー、第13班のリザードン、ライとアブソルのレイである。

「くーっ！！ やっぱり美味え！！」

「何飲んでんだ？ ライ？」

ライは空気を読まず陽気に何かを飲んでいた。

片手には茶色の小瓶が握られている。

「知らねえのか？！ レイ！ ‘ポケダミンX’だよ。」

小瓶のラベルには気取った文字で‘ポケダミンX 一日の元気の源！！’と書いてあった。

「またそれか・・・。お前、子供だなあ。21歳のくせに・・・。  
・。普通ハマるったら酒だろ・・・。」

レイはため息をついてライを見上げた。

「るせえ！！ 美味いもんは美味いんだよ！」

ライが怒鳴り返す。

そのとき、霧の向こうに黒い影が見えた。

「ああ、誰か来たな？」

「多分、侵入者だよ。ライ、フォーメーションRAで行くか？」

「おう！」

影が近づいてくる。一匹ではないようだ。

「・・・・・・?!」

影の正体は一匹のスカタンクと二匹のベトベトンだった。

「ああん？ 誰だてめえら？ そこどけ。」

ライが笑いながら答える。

「俺はシャドーのライ。こっちは相棒のレイだ。」

「よろしく。」

レイも笑みを浮かべる。

「てめえ等に用はねえ・・・・。そこをどけ！」

「それは無理な注文だなあ。なっ、レイ。」

「そうなんだ♪俺達、ここを守れて、上から言われてるんだよねえ。」

こちらは相変わらずの笑顔だったが、向こうの形相はみるみる恐ろしい物になっていった。

「何だとお?!?!」

「どうやらこいつ等、帰る気無しだよ。行くか、ライ。」

「さっさと終わらせようぜ!!」

そう言うのと、ライは持っていた小瓶を高く投げた・・・・・・

「『不意打ち』!!」

レイの姿が突然消えた。

「何っ?!」

スカタンクの足に突然痛みが走る。傷が出来ていた。

「どう？ 俺の早業。」

ベトベトン達も傷を負ったらしく、動きが鈍い。



「次は俺の番だア!!」

ライの尻尾の炎が青色に変わる。

「『炎究極奥義 ヒートバースト 爆炎』!!!!」

ライの口から、赤い炎が放たれた。

「ぐあああああああああつ!!!!!!」

パッリーン!

三匹が倒れると同時に、投げた小瓶が落ちて、割れた。

戦闘が終わった2人の後ろに、突然、一匹のポケモンが現れた。  
遺伝子ポケモン、ミュウツーだ。端に赤でSと書かれた、黒いマン  
トを羽織っている。

「お前ら、任務は終わったのか?」

「あ! シオラ様!」

「おう! 頭領、どうした?」

2人は振り返る。

「新しい任務だ。本当はあたしが行く予定だったんだが、お前ら、  
今すぐ行け。」

シオラは2人の前に一枚の封筒を突き出して言った。

「はいはい。行きますよ。」

「ライモンか……。ちょっと遠いが。」

突然レイが思い出したかのように顔を上げた。

「そういえば……………」

「ん、どうした?」

「い、いえなんでも……………」

ライが翼を広げる。

「なんだ? レイ。とっとと行くぞ!」

「ああ。」

アブソルを乗せたりザードンは、勢い良く飛び立っていった。

## 7 コンビネーション（後書き）

<ワードバンク>

ここでワードバンクです。

ア..何、わーどばんくって？

カ..話の中で専門用語が出てきた時に、作者の意思で解説する、謂わば気まぐれな国語辞典ってところさ。

そのとおり！ ってことで今回は・・・

‘ポケダミンX’

カ..やっぱり・・・（汗

はあい、それでは解説します☆

ポケモンの栄養補充ドリンクで、ライの大好物。ビタミンCやアミノ酸、食物繊維など、約100種類の栄養素がたっぷり入っている。

最近では、女性用にコラーゲンを多く配合した、‘ポケダミンXアセロラ味’も発売された。

販売会社は、ポケティ株式会社。

ラ..俺が毎日元気でいられるのは、こいつのおかげだ！

ちなみにポケティというのは、この会社の初の社長さん、リオデ

ロ・ポケティという人の名前から来てるそうだよ。

レ..あゝあ、すごい無駄知識だった！

ラ..なんだと（怒

## 8 任務開始（前書き）

やっとカガリ班任務スタートです♪

ア..けっこー遅かったな・・・

いろいろごめんなさい！  
それではどうぞ！

## 8 任務開始

「ん．．．」

うつすらと目を開けてみる。そこには見慣れたポケモンの姿。

「あ！ 起きた？ ライオ君！」

「．．．ああ．．．。ここは．．．どこだ．．．？」

視界がぼやけて周りがよく見えない。声が誰なのか分からないが、不思議と警戒心は湧かなかった。

足を動かしてみる。乾いた感じにカサカサという木の葉の音。

「お前．．．、ポエルか．．．？」

視界がハッキリしてきた。赤いからだが一番に目に入った。

「うん。」

赤いポケモンは頷く。体が焼けるように痛い。

「うっ．．．！」

「ライオ君！」

激痛が走る腕を見ると、ポエルが赤く光る手を乗せている。

「お前．．．何してる．．．？」

ポエルの白い歯が見える。

「医療中だよ！ 炎の傷は炎症じゃないと治せないんだ。」

「そう．．．か．．．」

体が温かくなってくるのを感じた。痛みも和らいでくる。

「ありがとう。もう、大丈夫だ。」

不安そうにするポエルの顔が、はっきりと見えた。

「そお？」

「ああ。それより、任務の話があるだろ。」

「．．．ああ、そうだね。」

2人は立ち上がった。

「カガリ先生、やり過ぎですよ。ポエル、まだ治療してるみたいですよ。」

森の少し開けたところで、アレン達は2人を待っていた。

「なあに、アイツには、あれ位が丁度いいよ。」

カガリは読書をしながら答える。本のタイトルは、‘イッシュの歴史学’。

「おおーい！ アレンちゃん！」

向こうに小さくポケモンの姿が見えた。

「ん、来たね。」

カガリは本を閉じた。

「で、今回の任務は、その家出した少年を見つけて、家に帰すことだ。」

「……。」

随分と期待外れの任務内容だった。

「他人の家計事情に付き合ってる暇は無いんだが……。」

ライオがため息をつく。

「ちなみに、難易度は星三つだ。」

「え、そんなに難しいの?!」

ポエルが身を乗り出す。アレンは難易度について知らなかったが、相当難しい任務のようだった。ライオもカガリに鋭い視線を向けている。

「で、探してほしいのは……」

カガリは腰の後ろに付けていたポーチから、紙を取り出した。

「この少年だよ。」

3人の前で、カガリは紙を広げる。

少年は、メタモンだった。ライオが腕組みをして目を瞑る。

「なるほどな……。」

「何が？」

アレンは振り返って尋ねた。

「『波導眼』を持ってる2人がいれば、見つかる訳だ。」

ライオはカガリとアレンを代わる代わる見ながら言った。

「そっか！ 相手は変身するもんね！」

ポエルが顔を上げてアレンを見つめた。アレンは理解できていない。

「アレン。」

カガリはアレンを見つめた。

「見た目は変わっても、波導は変わらないって事だよ。」

「……ああ!!」

アレンの顔にも納得の色が浮かんた。

「よし……。」

カガリ班は、ライモンシティに戻っていた。

「お前らにこれを渡す。」

カガリは3人にオレンジのスカーフを渡した。端に、‘S’ と黒色で書いてある。

「シャドー、第10班の証だ。好きところに巻け。」

アレンは顔を上げた。カガリは、‘プリズムアーム’ の腕に巻いている。アレンは右肩に巻く事にした。

「いいか、少年が見つかったら首に付けた無線で連絡しろ。」

「はい！」

「……散!!」



カガリの合図で、10班は任務を開始した。

## 8 任務開始（後書き）

ポ..ライオ今日は大人しかったな。

ラ..俺は常に冷静だ。

ア..うっそだあゝ

ポ..じゃあ、いつも怒ってるのは？

ラ..お前らのボケに乗ってやってるだけだ。

カ..意外とギャグ意識してんのね・・・（汗

## 9 追われる者（前書き）

任務が本格的になって参りました♪

今回はアレンとライオメインです

## 9 追われる者

アレンはライモンシティのデパート、＜ツインクル・スター＞を訪れていた。

「・・・ったく。先生も無茶言ってくれるよな・・・。」

波導眼を開眼させているとはいえ、なかなかメタモンらしき波導は見えない。

（メタモンの属性は無色<sup>ノーマル</sup>だから・・・波導は白く見える筈・・・。）  
だが人探しをするには、ここは人が多すぎた。

（ここが一番怪しいと思ってたんだけど・・・。）

アレンが立ち去ろうとした、その時だった。

アレンの赤い瞳に、1匹のポケモンが映った。

白い波導の、黄色いポケモン。電気ネズミのピカチュウだ。

（まさか・・・。）

アレンは立ち止まった。ピカチュウは、文具店のレジにいる。何やら財布からお金を取り出しているようで、顔は見えない。

（あの少年<sup>ターゲット</sup>だろうか・・・？）

アレンは近づこうとして、足を止めた。

アレンのように、属性と波導が異なるポケモンは沢山いる。

カガリもそうである様に・・・。

だがアレンは次の瞬間走り出した。その視線の先には、ピカチュウが会計を済ませレジを立ち去っている姿が。

そう、彼の顔の目は

点だったのである。

「おい、待て！」

アレンがピカチュウを追う。ピカチュウは振り返る。だがピカチュウはアレンのオレンジのスクーフを見た瞬間、叫んで走り出した。

「来るな！！！」

ピカチュウは今にも泣きそうである。

「何もしないから！！」

アレンは足を止めない。

「うわああああ！！ 『電光石火』！！」

ピカチュウは高速で走り出す。店の角を曲がったところで、アレンは彼の姿を見失っていた。

「……くそ……」

アレンは眉間にシワを寄せながら、首に巻いていた無線のスイッチを付けた。

「奴を……、奴を見つけました。」

「随分遅い連絡だな。」

アレンの背後から声がした。アレンは振り返る。

「……ライオ！」

相変わらず腕組みをして、壁に寄りかかっていた。

「アイツはまだこの中にいる筈だ。追うぞ。」

「あ……ああ！！」

2人は走り出した。

ピカチュウは走っていた。

（僕はもう帰らないって決めたんだ・・・）

歯をぐっと噛み締め、後ろを振り返る。さっきのヤツらは、もういない。

（とにかく、あいつ等から逃げないと・・・。）

ピカチュウは走り続けた。

「お前か。」

走っているピカチュウの目の前に、突然ブイゼルが現れる。

「?!」

腕組みをして立っているブイゼルは、尻尾にオレンジのスカーフを巻いていた。

「お前も・・・、お前もシャドーか！」

「・・・悪い事は言わねえ、さっさと家に帰れ。」

「くっ・・・。」

ピカチュウは一步後ずさりをする。

（どいつもこいつも・・・同じ事ばかり!!）

「僕は帰らない! 『十万ボルト』!!」

「何っ・・・?!」

ピカチュウの電撃が柱にぶつかり、爆発する。

煙が消えた後には、その黄色い姿は無かった。

「・・・・・・・・。」

「逃げたの？」

しばらくして、アレンがやってくる。

「ああ。」

ライオはピカチュウの逃げた方を見ていた。

「何か、訳有りのようだね。」

アレンがライオの顔を覗く。

「・・・、追うぞ。」

2人はデパートを出て、再び走り出した。

## 9 追われる者（後書き）

ア..なかなか捕まんないね・・・

ラ..だから今こうやって探してんだ！ 行くぞ！

ア..ああ・・・。

ポ..先生、何かあの2人、急に仲良くなってる・・・？

カ..んゝ、そうみたい。



## 10 事情（前書き）

ついに10話目！！！！

アレン…これも読者の皆のおかげだな♪

その通りですよ・・・（泣

少し遅くなりました、第10話です、お楽しみください！！

## 10 事情

「あ、見つけた。」

道路の角を曲がると、ピカチュウの姿があった。

「追うぞ。」

ライオとアレンも走り出す。ピカチュウがその様子に気づき、また角を曲がる。

「・・・人通りの少ない所へ逃げやがったか・・・。」

「ちよつと待って・・・、あそこには、誰かいる様だよ。」

アレンが波導眼で角の向こうを見た。

「・・・嫌な予感がするな・・・。」

ライオは表情を曇らせ足を速めた。

「はあっ、はあっ。」

ピカチュウは暗い路地を走っていた。

「・・・ここまでくれば・・・、もう・・・。」

後ろを振り返る。誰もいない。彼は笑顔になりため息をつく。すると何かにぶつかった。

ドンッ

「え・・・。」

前を見ると、誰かがいる。

爆炎ポケモンのブーバーンと、風船ポケモンプクリンだった。

「ああん？」

どうやら、いや、見るからに不良だ。

「あの・・・、えーと、ご、ごめ・・・。」

ピカチュウは足が震えて動けなくなっていた。

「へへっ、坊主、俺たちが誰なんだか知ってんのか、オイ！」

「あ、ああっ・・・！！！」

（誰か助けて・・・！！！！）

ブーバーンが近づき、灼熱の炎を纏った腕をピカチュウに向けた。

「おい、待て。」

ブーバーンが炎を発射させようとしたときだった。

「無駄な殺生はやめようぜ？」

一匹のリオルが立っていた。

「生意気だな、小僧。この坊主と知り合いなのかよ？」

リオルがゆっくりと近づいてくる。

「なあ、メタモンの少年。」

ピカチュウが顔を上げる。

「こいつからお前を助けたら、家へ帰るって約束してくれないか。」

リオルは笑顔だった。

勝てる確証はない。自信も無い。見れば分かる、奴らの波導、並みの量じゃない。

だけど、こいつだけでも助けないと。

任務は必ず成功させる。命に代えても。

「ライオ、行こうか。」

後ろから風のようにブイゼルが現れる。

「ああ。」

リオルが走り出した。高速で動く右足が、炎を纏う。

「私は……」

小さな、青い体が高く跳んだ。

「女の子だアっ!!!」

「馬鹿め。俺に炎技など通用しない!!」

アレンの『ブレイズキック』をかわしながら、ブーバーンが笑う。

「なら、これならどうだ？」

アレンが間合いを取る。すると奥でライオが構えていた。

「何っ!？」

「『水月』!!」

ライオの『かまいたち』と『水の波動』がひとつになり、三日月の形の刃を象った。

「ぐはっ!!!」

ブーバーンが仰け反る。

「これでも食らえ!!!」

その上にライオが跳躍し、真上で両手を上げた。

「『水の究極奥義 アクアレジェンド 爆流』!!!」

銀色の水が、ブーバーン目掛け落ちていった。

「な、何・・・だと・・・?!」

ブーバーンの体には傷一つついていなかった。

「へへ、てめえらの実力ってもんはそんなもんかよ!!!?」

ブーバーンが右腕を構える。

「どうやらお前らの波導は残り僅かのようなだが、俺はまだまだ有り余ってるんだぜ?!」

「もういいよ、ギオン。」

突然上空から声がした。上を見ると、膨らんだプクリンがいた。逆光で顔が見えない。

「あたし達、<sup>ノルマクリアー</sup>標的抹殺したんだから、さっさと帰ろ。」

どこかで聴いた事のある声だった。よく見ると、左手に見た事の無いポケモンが、傷だらけの状態で抱えられている。

「そいつは何だ?!」

ライオが叫ぶ。

「ん、こいつはね、アグノムっていうポケモンで、あたし達はこいつを、生きたまま、つれて帰れて命令されてんだ♪」

「でも・・・、さっき、抹殺って・・・。」

「それはね・・・、ンフフ。この子はいつか死ぬ運命だからよ。」

顔は見えなかったが、プクリンの声は笑っていた。

「おい、喋りすぎだ。帰るならさっさと行こうぜ。」

「はいはい。」

2人は煙と同時に消えた。

「・・・、何だったんだ・・・?」

道路は元の静けさに戻っていた。建物の間から、僅かに光が漏れている。

「さ、約束だ。帰ろう。」

「・・・うん。」

ピカチュウが立ち上がる。短い沈黙があった。

「・・・、実は、僕、家出した訳じゃないんだ。」

「え？」

「話してみろ。」

「うん、それは、一ヶ月前の話なんだけど・・・。」

ピカチュウは俯いて話し始めた。

彼は母親と二人暮らしだった。ある日、彼が学校から帰っていると、母が倒れていた。胸に傷跡があって、毒がしみこんでいた。

「それで、調べてみたら、ドラピオンの毒だって分かって・・・。」

治すには、迷いの森の薬草、セキカズラ赤蔓が必要だった。

だが、取りに行くのは困難で、大の大人でも帰ってこなかったと本に書いてあった。

そんな所に行くと言ったら、母さんはきっと反対するだろう。

「・・・。そうだったのか・・・。だけど、何で他の人に相談しなかったの？」

ピカチュウは顔を上げた。

「・・・、助かった者はいない・・・って、書いてあったから・・・。」

本には、一ヶ月までに赤蔓を与えないと、毒がまわって死んでしまおうと書いてあった。そんな短い期間に、赤蔓を取りに行くなんて、不可能に近い。他の人に、かわいそうな子と思ってほしくなかった。

「じゃあ、なんで私達から逃げたの？」

「・・・母さんが、オレンジのスカーフの人にやられたって言うてたから・・・。」

2人は黙り込んだ。

「でも・・・、母さんは・・・、きっともう助からない・・・。今日が過ぎれば・・・。」

ピカチュウは目に涙を溜めた。

「赤蔓があれば・・・。」

「その‘赤蔓’って、この花の事かな？」

後ろから、聞き覚えのある、低い透き通る声が聞こえてきた。

「カガリ先生!!」

笑顔のカガリとポエルがそこに立っていた。カガリの右手には、真っ赤な蕾のような植物が。

「それは・・・! ‘赤蔓’!!」

ピカチュウが差し出された花を受け取る。

「ありがとうございます!!」

ピカチュウの目から涙がこぼれた。

「さあ、早くお母さんに。」

「うん!」

ピカチュウは走って行った。

「良かった。だけど、なんで先生は分かったんですか？」

「無線で全て聞こえていたよ。」

アレンは、自分の無線の電源が、未だ点いていた事に気づいた。

「・・・!??」

「流石、ドジな所だけは俺を超えてるな。」

ライオが腕組みをして、横目でアレンを見た。その口元は、笑って

いた。ライオが初めて見せた笑顔だった。

「なんだとおお?!」

アレンは拳を握る。

「ああ、待て、勝負なら向こうの広場だ。」

「受けて立つ!!」

2匹が走っていく姿を、カガリとポエルは苦笑して見ていた。

こうして彼らの初任務は、成功に終わったのであった。



## 10 事情(後書き)

アレン…流石先生!!

ポエル…ライオもかつこ良かったじゃん♪

ライオ…フン…。

次回は新章となります♪

アレン…今度はどんな任務!!???

## 11 次の仕事は（前書き）

第11話です♪

アレン..今回は短めだね（汗

## 11 次の仕事は

夜。

任務が終わった彼らは、サンヨウシティに戻ってきていた。

ここはシャドー達の集う場所、サンヨウシャドー公民館。その一室、リーダールーム頭領室に、10班は集まっている。

「うん、よくやった。初めてにしてはなかなかいい出来じゃないか。」

奥の机にマントを羽織ったミュウツー、シオラが座っている。どうやら任務報告書を見ているようだ。

「その割にはちよつと疲れたけどね。」

「こら。」

アレンの頭をカガリが抑える。

「うん、で、次の任務だが……。」

シオラはそんな彼らを見無視して封筒を差し出した。

「何、これ？」

アレンが受け取る。開くと、何かの手紙のようだった。

「読んでみる。」

「うん。」

ライオが促す。アレンは頷いて封筒から紙を取り出した。

「えーと、＜最近ポケモンが行方不明になる事件が多発しております。私の娘、アグノムのチアンも、その一人。私は必死に探し回ったのですが、何の形跡も残っておりませんでした。しかし、つい最近、とある情報を入手したのです。チアンは何者かによって連れ去れた事。そして、その犯人の居場所を。」

どうかチアンを助けてください！！＞……。」

急いで書いたような、書き殴った字だった。読んでいる最中、シオラは、アレンの表情が変わっていくのを感じた。

「どうした？」

「ねえ、……ライオ……、この、チアンちゃんって……。」  
ライオは腕組みをした。

「ああ。」

カガリの表情も曇っていく。

「なんなの、皆、知ってるの？」

「……実は、任務中……」

アレンは全てを話した。

ギオンというブーバーンと、プクリンに出会った事。

プクリンの腕には、アグノムが抱えられていた事。

‘死ぬ運命’というプクリンの言葉。

「そんな事が……。」

「何故私に報告しない？」

カガリが頭を掻く。

「オレもここまで知らなかったもので……。」

シオラはため息をついた。

「ふう、だが、そうなれば話が早い。裏を見る。そこが目的地だ。」

アレンは封筒の裏を見て硬直する。

「サンヨウ学園第一小学校……！」

そう、本来なら彼女が通っている筈の学校だった。

「今日はもう暗い。明日、任務を開始する。」

カガリの言葉で、4人は散っていった。

## 11 次の仕事は（後書き）

ギオン…ぐははは！！ 俺達のターンだあ！！！！

という訳で謎の2人に来てもらいました。

プクリン…あたし達も、出番多くなってくるね♪

次回はチアンちゃんが・・・

プクリン…ンフフ♪

ギオン…なんだよその笑い（汗

## 12 捕われのリオル（前書き）

うん、これ、ずっと前から書くの楽しみにしてた

プクリン…残酷かもよ？

多分グロくは無いので（汗

## 12 捕われのリオル

「ぐあああああっ!! 私に・・・何を・・・する気だっ?！」

「なあに、ただ、あなたのエネルギーが欲しいだけだよ♪」

「うわああああああっ!!！」

暗い建物の中に、プクリンの姿と、力尽きたアグノムの姿があった。そのアグノムは、哀れにも口を大きく開け、目を見開き、まるで口から魂を吐き出したような顔をしている。アグノムの体は、枯れた花のようにしわがれていた。

### 竜螺旋の塔

人々はここをそう呼ぶ。

しかし彼らにとってここはアジトであった。

「おい、遅えぞ!! チハル!!」

「まあ待ってよ、ギオン。さっきアグノムから波導を取り出してたんだから。」

チハル、と呼ばれたプクリンの両手には、青い光が抱えられている。チハルは、そのまま暗い広場を真っ直ぐ歩いていく。

広場の中央には、奇妙な光景が広がっていた。

一枚の大きな壁が立っている。その中央には、青白く輝く円型のカプセルが埋め込まれていた。中に、一匹のポケモンが入っている。そして、水も入っているのだろうか、ポケモンの口から時折空気の泡が出ていた。ポケモンの四肢には鎖が巻き付いている。その鎖は、カプセルを突き破って壁の端まで続いていた。

「暗いんだよね、ここ。」

チハルはそう言うと、青い光を掲げる。青色の光が辺りに広がり、

一瞬にして建物の隅々まで明るくなる。竜螺旋の塔、ここは、緑のタイルと肌色の柱で構成されていた。

「臭いなあ。ギオン、ここ、死んだ人のおいがする。」

チハルは後ろを振り返り、壁に寄りかかるギオンを横目で見た。

「仕方ねえだろ、お前が掃除しないんだから。」

「掃除係はアンタでしょ？」

「んだとお・・・?!！」

「オイ。」

口喧嘩を始めた二人を宥める様に、上からジバコイルが降りてきた。

「ソナナ事ハドウデモイイカラ、早く波導ヲ。」

「はいはい。」

チハルはジバコイルの方を向いて、カプセルに向かって歩き出した。

「アレン様。」

チハルが名を呼ぶ。ポケモンは顔を上げる。そのポケモンは、紛れもなく、リオルだった。

「アグノムの波導、受け取って。」

「アレン様ニ向カッテ、何テ言ウ態度ダ！」

「うるさいよ、ハイド。」

リオルがゆっくりと右目を開ける。その目は、漆黒の色を放っていた。リオルが口を開くと、泡と共に渦が発生し、カプセルを通し波導がゆっくりと吸い込まれていく。

全てを飲み込むと、ドクン、と心臓のような音が響き、リオルは再び眠りについた。

「これで、7人目。」

チハルがため息をつく。

「ドウヤラ、サンヨウノ虫達ガ、我々ヲ嗅ギマワリ始メテイル・・・。オ前ラ、持チ場ニ着ケ。」

「了解。」

「ハイドは？」

「私ハ少シ他ノ用事ガアル。」



「・・・分かった。」

3人はその言葉を最後に姿を消した。

同時異所。

アレンとカガリは食事中であった。

「なんで任務帰りにカップラーメン・・・。」

「はは、ゴメンな。これしかないんだ。」

カガリはふくれっ面のアレンに笑顔で答える。そして2人は麺を啜った。(ダークライであるカガリがどのように食事を取っているか、それは読者の想像に任せる。)

「御休み、先生。」

「ん、ああ、おやすみ。」

アレンはベッド、カガリは敷布団に寝転がり、電気を消した。

## 12 捕われのリオル（後書き）

ポエル…何、ドッペルゲンガー?!!

チハル…違うよ♪

でも名前も同じだから・・・

アレン達も大変になってきそう♪

カガリ…。。。。。

### 13 ご対面（前書き）

投稿がかなり遅れました（汗  
すみません

カガリ…第13話始まるぞ〜

## 13 対面

「準備できたか？」

カガリは愛用の灰色のポーチを腰に巻きながらアレンに尋ねた。

「勿論。」

アレンは肩にスカーフを巻き、立っている。

「よし、行くぞ。」

2人は家を出た。

「集合場所は？」

2人はサンヨウシティの街を歩いていく。今日は何故か人通りが少ない。

「もう少しで着く。そこでライオ達と合流だ。」

カガリは目線を変えないまま答えた。

「そうはさせないよ。」

「?!?!」

突然後ろから声がした。

「キミらの狙いって、あたしでしょ？」

アレンは硬直する。

後ろには、1匹のプクリン。

彼女はあの時、間違いなくアグノムを連れ去ったポケモンだ。だが、それ以上にアレンは驚いていた。

（あの時・・・、逆光で顔が見えなかったから・・・。）

「道理で・・・。」

「アレン、どうした?!」

俯いていたアレンが、ゆつくりと顔を上げた。

「久しぶりだな、チハル。」

「あゝら、覚えててくれたんだ。嬉しいな♪」

チハルは笑う。

「アレン・・・、こいつが誰なのか、知っているのか？」

「ああ。今回の任務の犯人。そして、かつて私をいい様に扱ってくれた、いじめっ子の一人だ。」

「・・・！」

カガリが目を見開いた。チハルはまだ笑い続けている。

「そうよ。そして、あなた達の運命を決める人♪」

「何っ?!！」

「ここであな達を殺す。」

チハルの笑顔が不気味な物へと変わっていく。

「大丈夫、すぐに楽にしてあげるから。・・・『気合球』！」

チハルの手からオレンジの球体が飛び出す。球体はアレンに向かって一直線に飛んでいく。

「『雷撃』!!！」

カガリがアレンの前に移動し、黒い電気を纏った腕を突き出す。2つの技が激突し、爆発を起こした。

「・・・くっ!!！」

カガリは間合いを取る。煙が晴れると、チハルが構えているのが見えた。

「流石・・・。簡単には殺せないわね・・・。『ハイパーボ・・・！』」

「ヤメロ。」

口を大きく開けたチハルの横に、ジバコイルが突然現れる。

「!!！」

「・・・どうしたの、先生？」

その瞬間、カガリの形相が突然変わった。

「・・・コレハコレハ、カガリ様、オ久シブリデス。」

「・・・お、お前は・・・、ハイド・・・!!」

カガリが一步後ずさりする。

「なあんだ、知り合いだったの、ハイド。」

「アア。」

ハイドはチハルに言った後、ゆつくりとカガリの方を向いた。彼の視線がカガリに突き刺さっている。

「私ハ諦メテイマセンカラネ・・・。」

「・・・っ・・・!!」

「先生・・・?!」

アレンはカガリを見て、驚いた。彼が今までにない殺気の溢れた顔で、ジバコイルを見ていたからである。

(前にも・・・、似たような感覚があった。

そう、キガルさんとバトルした時。

3EPって言葉で、後ろから感じた物。

今の先生に似ている。

もしかして・・・あの時の殺気は・・・!)

「それは光栄だな。」

カガリがハイドを睨んだまま口を開いた。

「オレもお前を殺りたかったからな。」

閉じていた左目をゆつくりと開く。その目は赤い光を放った。ハイドの目が笑う。

「イイデスヨネエ、アナタハ。」

アレンはハイドの方を向いた。

「ソノ目、アナタノ物ジャ無イノデシヨウ?」

「・・・?!」

アレンは目を見開いてカガリを見上げた。

「・・・。」

カガリはハイドに答えず、細い目でハイドを睨んだ。

(どういう事……?!)

戸惑うアレンは彼の眼中に無いのだろう。カガリは顎を軽く上げる。そして静かに口を開いた。

「召喚。」

ボンッ

その言葉と共に、白い煙が辺りを包んだ。黒く巨大な影が、煙の隙間から見え隠れする。

『何だ……。カガリか……。』

重い声が響く。ズシン、と音がして、青い足が煙から出てきた。

「お前が必要なんだ……。こいつを殺るのに。」

煙がゆっくりと晴れていく。そして巨大なポケモンが姿を現した。

「……ディ、ディアルガ……!!」

チハルがポケモンを見上げ、後ずさりする。

「フフ……。全クカガリ様ノ強サハ無限ニ成長スルノデスナ。」

赤く丸い目を怪しげに細めて、ハイドは笑みを浮かべる。

『久々だな。お前と会うのも。』

「ああ。」

召喚という能力は、シャドーが考案した技で、言わば、呼び出しシステムである。

伝説の名を持つポケモンと契約を結ぶ事によって、いつ何時でも呼び出す事ができるのだ。

しかし、ランクの低いシャドーはこの技を扱うのが困難。仮に契約をして呼び出したとしても、ポケモンが言う事を聞かない事もある。

るし、気まぐれな性格であれば逆に波導が乗っ取られてしまうこともある、リスクの高い技なのだ。

「オレは、シンオウの神と呼ばれる3体と契約を結んでいる・・・」

「！！」

「！！」

ハイドとチハルは驚きを隠せない。

「先生・・・」

アレンは座って見る事しかできなかった。

「さあ、始めようか。」

ディアルガが青く輝き始めた。

「・・・！ ソノ技ハ・・・！！」

『全ての時を飲み込むエネルギー体、それを打ち込んでさし上げよう。』

青い輝きは丸い形となり、ディアルガの口に集中する。

『時の咆哮』！！



### 13 ご対面（後書き）

いや、これでカガリの謎がまたひとつ増えてしまいましたね。

アレン..でもカッコいいなあ、先生のそのギャップ。

チハル..あたしの好みとは違うけど、まあ強いって事は認めてあげる♪

カガリ..な、何か照れるな・・・。

## 14 ディアルガの総裁（前書き）

遅れました（汗）  
すいません（汗）

アレン…最近良く遅れるな、作者（怒）

許して（汗）

## 14 ディアルガの総裁

『時の咆哮』！！

ディアルガの口から、青い、ビームのような波導が繰り出される。

チハルの足が竦む。

「『電磁神速』！！」

そんなチハルをハイドが抱え、突然消えた。

『・・・消えたな・・・』

ディアルガが呟く。

時のエネルギーが爆発を起こした。白い煙が辺りを包んだ。

「ゴホッ！」

「アレン、大丈夫か。」

「ああ・・・。なんとか。」

煙が晴れたが、やはり二人の姿は見えない。

「隠れても無駄だ！」

カガリが波導眼で周りを見る。

「・・・どこだ・・・？」

アレンも周りを見るが、それらしき波導は見えない。

『私は波導を溜める・・・。今は動けんぞ。』

ディアルガは構えたまま動かなくなった。

「・・・。」

カガリは静かに左腕のスカーフを取った。その腕の奇妙な模様が白

く光る。

「『黒竜相殺』!!」

両腕に黒い雪が発生し、竜を象る。

2匹の竜は両腕から勢いよく飛び出し、高速で動き始めた。

「奴等を・・・探し出せ。」

アレンはただ座って見ていた。黒竜が地を這い、まるで犬のように辺りの匂いを嗅ぐ。

「流石カガリ様デス。然シ。」

突然、アレンの後ろに影が落ちる。

「?!!!」

振り返ろうとすると、首をきつく？まれた。ピンク色の腕が視界に映る。

「なっ・・・!　ぐあっ!!」

「アナタが攻撃したら・・・。どうなるのか分かるわよね？」

チハルが更にアレンを締め上げる。

「うわあああっ!!」

苦しむアレンを見ながら、チハルは笑った。

「懐かしいわあ。この感覚。よくこうやって、アナタをいじめていたもんよ。」

カガリがプリズムアームを構えるが、チハルがアレンを締め上げる。  
「・・・・・・・・。」

カガリは黙っていた。

まだ白い煙が立つこの場所は、沈黙に襲われた。

ジジジ・・・ザ・・・ザザ・・・

突然、機械のような音がした。チハルが片手で耳を探る。無線機がついていた。

「もしもしいゝ？ 誰？」

『私だ。ルーンだ。・・・、ライコウを、捕獲した。』

「ふうん・・・。抜け殻野朗も少しはやるじゃん。」

『その呼び名、やめろ。』

「良クヤツタ！ 帰ルゾ、チハル。」

カガリが目を細める。

「ディアルガ。」

『ああ。もう動ける。』

ハイドたちがその場を離れようとすると、ディアルガが咆哮をあげた。

グオオオオオオオオオ！！！！

その瞬間、辺りがセピア色に染まった。目を見開いたままのハイドも、ジャンプしているチハルも、全てが止まっている。そう、時間が止まったのだ。

メテオ・ダイヤモンド  
『時間停止。』

「・・・・・・・・。」

ディアルガが呟くと、唯一セピア色に染まっていないカガリが、ハイド達に近づいていく。そしてチハルの腕からアレンを抱き上げ、そのまま右腕に抱えた。左手を後ろに構え、波導を集中させる。

「『雷撃』!!!」

黒い電撃を纏った腕が突き出される。チハルの頬目掛けて。

しかし、突然チハルが消えた。

勢い良く突き出した腕が、空しく空気を裂く。

「無駄デスヨ。」

「何っ?!?!」

セピア色がみるみるもとの色に戻っていく。

メテオ・ダイヤモンド  
『時間停止を破るだ?!』

『森羅万象。』

どこからか声がした。皆が一斉に振り返る。

笑い声をあげるハイドの後ろから、白く巨大な影が浮かび上がる。

カガリが後ずさりした。

「ア・・・、アルセウス・・・!!!!」

白く輝くその神の上に、ハイドが立つ。チハルもジャンプしてその上に乗った。

「マタ遭イマシヨウ、カガリ様。ソシテ、アレン殿。」

3人は神速で消え去った。

「・・・遅いな。カガリ。」

ライオが腕組みをして立っている。その隣に、ポエルもいた。2人はいち早く学校に着き、任務開始を待っていたのだ。

「そうだね・・・。何かあったのかな?」

「探してみるか。」

「ああ。」

2人が走り出す。

ズシン！

突然、目の前にポケモンが現れた。

「まあ、待てよ。」

「お、お前は・・・？！！」

ライオが声を上げた。何時かのブーバーンだった。

「ライオ、しってるの？！」

「ああ。」

戸惑うポエルに、奴を睨みながら答える。

「ああ？！ 見覚えあると思ったらあん時のブイゼルかよ！ つまんねえな。俺はあのダークライとバトルしたかったってえのに。」  
ライオが眉間に皺を寄せる。

「黙れ！ 俺が相手だ！」

「ボ・・・ボクも！」

2匹は一歩進み出た。

「ふん。いいだろう。料理してやる！！」

一斉にライオたちが駆け出した。ブーバーンも走り出す。

「食らえええっ！！」

ライオが水の塊を構えた。

## 14 デイアルガの総裁（後書き）

カガリ…トドメ・・・刺せなかった・・・（泣

チハル…残念♪

次はギオンとライオとポエルのバトルです

ギオン…俺様のターンd・・・ぐおふおっ！

ライオ…黙れ（怒↑ギオンに『冷凍パンチ』★



## 15 混ざり合う絆（前書き）

今回ポエルとライオが大活躍♪

ポエル…よし！ 頑張るぞ！

ライオ…フン…。

そういえば、今回でポエルの秘密も明らかになります♪

ポエル…ほ、ホント？！

カガリ…やつとだね。

全…では、どうぞ！！

## 15 混ざり合う絆

「うおおおおおっ!!」

ライオが走りながら、水の塊を持ち上げる。

「『水の波導』!!」

「それがてめえの本気かア?! 『火炎放射』!!」

ギオンも腕から炎を出す。水と炎がぶつかり合い、白い蒸気が辺りを包んだ。

「・・・今だ!!」

ライオが振り返り叫んだ。ポエルが構える。

「『ツルのムチ』!!」

「あっ?!!」

ポエルのふさふさした体毛の間から緑のツルが現れる。ライオは顔を引きつらせる。

「お前、何で草技が使えんだ?!」

ポエルはツルを操作しながら答える。

「ボクの波導は草系だからね・・・へへっ。」

ツルはギオンに向かって伸び、その体にスルスルと巻きつく。

「つつ・・・! こんな草、俺の熱で・・・!!」

ギオンの体が高熱を放ち始める。

「熱っ・・・!!」

ライオの体から汗が流れ出す。地面からも熱が漂う。しかし、ギオンを締め付けるツルは焼けるどころか、更にきつく彼を締め上げた。

「な・・・! 何故・・・だ・・・?!」

ギオンが灼熱の中苦しそうに喘ぐ。

「ボクの放つ草には、炎の波導が練りこんであるんだ。熱には強いよ! マグマでも溶けない!」

「よし！」

ライオがギオンに接近する。

「『雨乞い』！！」

ギオンの頭上に黒雲が広がり、雨が降り始めた。

「サンキュー、ライオ！ これでツルもぐんぐん伸びるよ。」

「ぐっ。」

ツルが雨を受け、更に成長していく。

「よし、行くぞ！ 『かまいたち』！！」

「え、ちよっと？！！」

ライオが空気の刃を飛ばすと、それまでギオンを包んでいたツルがあっさりと切れた。開放されたギオンが地面に落ち、ツルの破片が辺りを舞った。

「ライオ、ダメじゃん！ ボクのツルを勝手に切らないでよ！」

「フン。てめえのツルが弱すぎなんだよ。」

「何だア？ 仲間割れかてめえらア？！」

ポエルとライオはお互いをにらみ合っている。

「だいたい、キミは、いつも、タイミング、ってもんが分かってない。」

「んだとお？！！」

勝手に喧嘩を始める2人を、ギオンは呆然と見ていた。

「よく分からんが・・・、チャンスだな！ 『ダブルバズーカ』！」

「！」

両腕から火の玉が繰り出される。

「なっ？！」

「えっ？！」

2匹はそのまま吹き飛ばされた。高温の炎が体を包む。

「熱い！」

ポエルが叫ぶ。特性‘貫い火’の彼でも、この炎には耐えられないらしい。

「『水鉄砲』！！」

ライオの水でようやく炎が治まった。

「・・・喧嘩している・・・場合じゃないね・・・。」

「ああ！行くぞ！！」

傷だらけの体で、2匹は立ち上がった。

「『大文字』！！　『リーフストーム』！！」

「『水月』！！」

ポエルの炎、草、ライオの水が合わさり、虹色のエネルギー体ができる。

「はあああああ！！」

「うおおおお！！」

「『『レインボーフロート』！！』」

「何っ・・・？！！」

エネルギー体はギオンに向かって落ちてくる。すると、突然彼の耳元の無線機に電源が入る。

『ギオン！　聞こえるか？　私だ、ルーンだ。退散の命令だぞ！！』

「・・・くっ・・・、了解。」

ギオンは悔しそうに上を見上げた。目の前にはもう、エネルギー体が近づいていた。

ドガアアアアン！

技が地面にめり込み、爆発する。黒い煙が辺りを包んだ。

「やったか・・・？」

煙が晴れるが、そこにポケモンの姿は無かった。

「・・・逃げられた・・・ね・・・。」  
ライオが歯を噛み締める。

キンコンカーンコン

遠くで12時を示すチャイムが鳴っていた。

## 15 混ざり合う絆（後書き）

ライオ..勝った気がしねえ。あいつ等、すぐ逃げやがって・・・

カガリ..はは・・・そうだね。

そろそろ新章に入ります♪

お楽しみに！

## 16 来訪者（前書き）

今回で新章、そして！！

アレン…なんとあの方が！

それでは始まります！ 第16話！！

## 16 来訪者

走っていると、霧の中に、ぼんやりとアジトが浮かんでくる。

「ふう・・・、やっと着いたぜ・・・。」

肩で息をしながら、重い扉を開けた。黄色く光る波導をアレン様に差し出すチハルの姿と、アグノムの横にあるライコウの死体が一番に目に入ってきた。

「17属性ノウチ、コレデ10ハ揃ッタ。アト7ツダ・・・。」  
ハイドが笑みを浮かべる。奥にはヌケニンのルーンもいた。

「おい、ギオン、ちょっと来てみる。」

ルーンが奥から手招きをしている。

「何だ？」

俺は重い足を上げて近づく。

「ついに完成した。」

「何が。」

「次元召喚。」

俺は、ふう、とため息をついた。こいつは、何かあれば必ず研究の話だ。

「ハイドは興味を持ってくれないんだが・・・。でもついに完成したぞ！」

肩がこってきた。

「で？ 何なんだ？」

ルーンはここぞとばかりに身を乗り出して喋りだす。

「別次元からポケモンを連れて来れるのさ。今までは創造神を呼び出すのに、わざわざ神の領域まで行っていたが、これがあれば通常の召喚術と同じようにできるぞ。」

楽しいのはお前だけだ。それより、ターゲットを捕獲して来い。と



俺は心の中で愚痴を言う。

「早速やってみるぞ♪」

そういうと奴はくるりと背を向け、真っ黒な背中の穴を見せ付けた。

「そ・・・それは・・・、見た者の魂を吸い取るー・・・。」

「大丈夫だ。その力ならちゃんと制御してある。それより、行くぞ  
！！」

ルーンはうなりながら体の穴に波導を集中させる。すると、背中の穴から紫色の光が現れた。

「おお！ すげえ！！ 神の領域が見える！」

紫色の光が、鏡のように、眠るアルセウスを映し出した。

「そう・・・だろ・・・。ってあれ？」

丸まっていたルーンが起き上がるのと同時に、光が消えた。

「まだ・・・未完成の・・・ようだな・・・？」

「だね・・・。」

ここは・・・どこだ？

見た事があるぞ・・・ここは・・・、セツカの湿原？

朝霧に包まれて見えないが・・・この湿度は・・・おそらくセツカの物だ。

だが・・・、俺はこんなところにはいなかったぞ・・・。  
たしか・・・リゾートデザートに・・・

ゼロがない。レックも。あいつ等何処行っただ？

混乱する彼の前に、突然ポケモンが現れた。

「リザードンの割には奇妙な格好をしているな・・・。」

薄紫の体に黒いマントを羽織っている。何か呟いているようだが、声が小さく聞き取れなかった。

「み、ミュウツー？ 誰だ？」

「それはこっちの台詞だ！！・・・と言いたところだが、私から名乗ろう。私はシオラ。シャドーの頭領<sup>リーダー</sup>を勤めている。」

俺は頭を傾げた。

「何だ、シャドーって？ 悪の組織か？」

俺がそういうと、シオラは驚いたようで、

「ちょっと来てもらう！！！」

と、『サイコネシス』で俺を持ち上げた。

「何だ、この世界。」

おそらく俺は、今、別次元に来ている。

「いってえー！！！」

何なんだ？ 突然周りが見えなくなっ・・・気づいたら・・・。

「ここ・・・街のようだな。」

「うん。」

シルムが頷いて街角から道路を覗いた。ポケモンの行き交う姿が見える。

「こんな所・・・地図にも載ってないよ。」

シルムはバックから地図を取り出し、頭を掻く。

「どうする？」

「そうだな、・・・」

ぐうぐう

考えていると腹が鳴った。きっと、深く考えるな、ってことだ。

「とりあえず、朝飯だ！」

「おう!!」

よく晴れた朝だった。

## 16 来訪者（後書き）

という訳でフォックさんと、ドルク、シルムに来てもらいました！！

フォック…よろしくな！！

ドルク…来たぜ！！

シルム…どうも！！

フォック先生ありがとうございます！！

でも、コラボ小説って思ったよりムズいな（汗

アレン…まあ、作者の事は置いて、皆これからの展開に期待だ  
！！

おい（汗

## 17 それぞれの出会い(前書き)

今回短め(汗

カガリ..おい(汗

アレン..タイトルからしてそろそろ・・・？

では、どうぞ！

## 17 それぞれの出会い

「カガリ、お前は残れ。」

「?!」

任務報告終了後、シオラは言った。

アレン、ポエル、ライオは部屋を出て行く。

「何なのです？」

カガリの問いに、シオラは椅子にもたれて答えた。

「来ていいぞ。」

「？」

突然、窓の外からポケモンが入ってきた。オレンジの体に尻尾の炎。リザードンだ。だが、明らかに普通では無い。まず、外見。頭にゴードル、首にはスカーフ、腰には剣があった。そして、中身もただ者ではない。

(こいつの波導……。並ではないな……。)

何というか、ディアルガの物に近い。

時のエネルギーを感じる。

「まだ、名乗っていなかったな・・・。」

彼は静かに口を開く。その視線は、カガリへと向けられていた。

「俺の名は、フォックだ。」

任務終了後、アレンは帰るために大通りへ出ていた。ポエル達はこのように、それぞれの故郷に帰っていったのである。

「カガリ先生、呼ばれてみたいけど、何かあったのかなー？」  
呟いて手を頭の後ろに回す。見上げると、青い空に、白い雲。いい天気だ。思わず微笑む。

ドンッ

考え事をしていると、誰かとぶつかった。反動でアレンはバランスを崩す。

「いてて・・・。大丈夫・・・？」

顔を抑えながら首を持ち上げる。目の前には、ヒコザルとナエトルの姿。アレンと然程年齢差は無さそうだったが、学校でも見た事の

無い、見慣れない顔だった。

「・・・うつ・・・ごめんな。ただ俺たち、腹が減ってて。」

「そうなんだ。きがついたらこんな所にいたんだから・・・。」

「？」

どうやらこの人達、この人ではないようだ。

「・・・なあドルク・・・。」

「何だ？」

歩き出す少女の背を追いながら、シルムが不安そうに尋ねてきた。

「本当によかったのかな・・・？ ご飯を、しかもタダで食わせてくれるなんて・・・。」

何だ、そんな事か。

「大丈夫だろ。」

俺は少し反り返って答える。

「でも。初対面にしては初対面にしては優しすぎない？」

「大丈夫だって言ってるんだろ？ アイツからは、悪意なんて感じられねえぜ？」

「・・・。」

シルムはまだ不安のようだったが、前を向いて歩き始めた。

さあて、やっと飯が食えるな。

歩いていく3人の姿を、街角の影から見張る者がいた。



「あいつらですか、‘望み’というのは。」

「3人・・・とは聞いていないが、あのリオル、間違いない。お前が言ってくるい。」

「分かっていますよ。・・・。」

## 17 それぞれの出会い（後書き）

アレン…さあて、何をつくろっかな〜♪

ドルク…．．なあ、カガリ。

カガリ…ん？

ドルク…アレンは料理作れるのか？

カガリ…さあ、どうだろうね？

小6だから、家庭科の授業程度ならできるんじゃない？

ドルク…不安だな（汗

## 18 剣士と拳銃使いと演奏者（前書き）

今回は新たな出会い、そして重大な真実が！

アレン…何だろ？

それではお楽しみください！

## 18 剣士と拳銃使いと演奏者

「あなた、アレンさん、で合ってます？」

陽気に歩く三人の前に、不意にポケモンが現れた。

（気配を感じなかった！ 一体何時・・・？）

アレンの構えに、シルムとドルクも不安を覚える。

「誰だ、お前。」

アレンが睨みつける。

「アレン、知り合い・・・じゃないみたいだな？」

「ああ。」

ポケモンはコロトックという種族だった。肩にはツタージャが乗っている。

「これはこれは失礼。名乗っていませんでしたね。私の名前はグリソン。そして・・・」

「私はキースだ。」

グリソンが紳士的に名乗ると、キースは肩から降りてアレンの前へ進み出た。

「突然の所申し訳ない。少し来て欲しい所があるのだが。」

アレンは構えを崩そうとしない。ドルクとシルムも戦闘体勢をとる。そんな様子の彼らに、キースはため息をついて首を横に振った。

「シオラ様と3EP先輩のたのみ、と言ってもダメかな？」

夢の跡地の古びた柱の奥に、こんな洞窟があるなんて知らなかった。

「目的地は、この先だ。」

キースが指を指す。

「歩きながら我々の事も話そう。」

少し薄暗くて湿ったその道を、キースが歩いていく。3人は顔を合わせ、頷くと、後を付いて行った。

「私とグリソンは、シャドーの暗殺部隊の隊長だ。今まで殺してきたポケモン（ひと）の数は計り知れない。彼とも長い付き合いになる。」

キースが振り返り、グリソンと顔を合わせて笑う。

「そうですね。キースさん。」

キースは歩みを止めない。

「彼は音楽家であり剣士でもある。」

アレンはその言葉にグリソンを見上げる。横をスルスルと歩く彼の背中には、ヴァイオリンのケース、腰には剣が身につけられていた。その様子に気づいたグリソンは、アレンを見つめて静かに口を開いた。

「これは私の相棒、‘ルース・ド・ムール’。そしてこれは、最近 はあまり鞆から抜きませんが、‘リ・カルアーゼ’。」

彼は遠い過去を見るような目で、ケースと剣の鞆を順に指で指して言った。

「今度は私がキースを紹介しましょう。」

グリソンは前を向いて、勇敢にも皆を導いてゆくキースを見つめた。

「私が‘ルース・ド・ムール’の演奏者なら、彼女は、草の指揮者

スベンチャリスト

です。愛用の拳銃を使い、敵を射殺する。15歳でランク1級に就いたのです。リーダーシップもあり、彼女は一度も任務を失敗させた事は無い。」

自分よりも背が低く、年上の彼女を、見縊ってしまったようだ。

「照れる事を言うな。私は人殺しな罪なポケモンだ。今更名誉もクソも無い。」

振り返ることなく呟く姿が、アレン達の脳裏に焼きついた。

「・・・2人とも、かっこいいね。」

「ああ。」

洞窟を進んでいくキースが、突然歩みを止めた。

「・・・ちなみに・・・、」

洞窟に声が響く。どこかで、水が落ちる音も聞こえる。

「私の相棒は、即殺2号（シャット02），だ。」

片手に握られたそのシャット02は、僅かな光を受け、黒い光沢を放った。

「二人ともに、知らせなければならない事がある。」

何時に無くシオラは真剣だった。

「カガリは、シャドーとして、そしてフォックには、その实力を見込んで。」

カガリとフォックは顔を見合わせる。2人はお互いに頷き合うと、シオラに向き直った。

「・・・ソウリュウシティから、宣戦布告だ。時は一ヵ月後。」  
シオラが2人を見つめた。

「戦争が、始まる・・・!!」

戦いの日まで、あと、31日・・・

## 18 剣士と拳銃使いと演奏者（後書き）

フォック..戦争とは、大変になってきたな。

ドルク..俺たちは俺たちで、一体何処に向かってんだ？

グリソン..もう少しで到着ですよ♪



## 19 3つの穴(前書き)

はぁ・・・

シルム…あれ？ Renさんどうしたの？

カガリ…いろいろあったらしい。そっとしておいてやれ。

よっしやああああ！！！！

アレン…復活早っ！！

今回で修行編スタートだぜえ！！

ドルク…面白そうだな！！

よし！ んじゃ第19話行ってみよー！！

ド・シ…行くぜ！

アレン…押忍！！

カガリ…さっきのは何だったんだ？

## 19 3つの穴

洞窟を只管に歩いていると、不意に明かりが見えた。

「何だ？」

ドルクが駆け出す。ついていくと、大きな空洞に出た。岩の中を、何かの技で丸く削られているようだった。隅には等間隔で松明があり、風も無いのに轟々と揺らめいている。

「・・・変なの。」

「おい！ こっち！ 見てしろよ！」

ドルクが前方で叫んだ。ドルクの前には、大きな穴が3つ、ぽっかりと開いていた。

「道が・・・分かれている？」

アレンが呟くと、天井から声がした。

「おい！」

見上げると、一匹のポケモンが天井にぶら下がっている。

「誰？」

「クレディア！！」

後ろでキースが微笑みながら呼んだ。どうやら知り合いのようだ。キースの様子を確認すると、ポケモンはジャンプして降りてきた。

「待ってたよ、キース。それと、紹介が遅れたね、アレン。僕の名はクレディア。彼女と同じ、暗殺部隊の一人だよ。3EP・・・あ、いや、カガリ先輩に言われて、ここで待ってたんだ。」

クレディアと名乗った勝利ポケモン、ビクティニは、にっこり微笑んで一礼した。カガリ先生を知っているのなら、道理で私を知っている筈だ。彼の首には、黒いスカーフがしっかりと巻かれていた。

「なあ。」

ドルクが不意に尋ねてきた。

「さっきから3EPだのカガリだの言ってるが、一体誰の事なんだ？」

疑問に思うのも無理なかった。

「私の先生。種族はダークライだよ。」

私が簡潔に言っていると、ドルクとシルムは目を白黒させて、一步後ずさりした。

「お・・・お前等、悪い奴だったのか?!?!」

彼等は相当驚いているようだ。

「何で？」

確かに先生を見て珍しそうな顔をする人もいるが、‘悪い’と言う人は初めてだった。

「オイラたちのいた所では、ダークライは悪い奴だったんだよ?!?!」

「悪い奴って・・・？」

「世界を支配しようとしてたんだ。」

ドルクが静かに話した。私の頭の中で、カガリ先生、と世界を支配する、と言う事がぐるぐる回った。そのうち、可笑しくなって笑ってしまった。

「ははははは！」

「「?!」」

私の笑い声が洞窟に響く。2人は未だ構えを解こうとしない。

「先生が？ 世界を支配？ そんな事しないよ、先生は、絶対！」

だって、先生は、私の事を助けてくれたんだもん！」

私は声を荒げた。先生は、間違ってもそんな事はしない。

「そう・・・か・・・。じゃあやっぱり、ここは別世界なんだな。」  
ドルクが俯いて呟いた。シルムも俯く。そんな彼等をみて、キースが口を開いた。

「大丈夫だ、帰る方法はある。お前等は、ちゃんと帰れるぞ。」  
「ホント?!」

「ああ。」

キースが頷くと、2人は顔を見合わせて笑った。アレンは、目で、2人の波導が暖かくなっているのを感じと見た。

「ただ、やらなければならない事がある。」

キースの冷やかな声に、全員が注目した。松明の火が揺らぐ。

「これから、お前等に試練を受けてもらう。」

また、火が揺らいだ。壁にぼんやり映る5人の影も、闇の中に揺れた。

「後ろに、3つの穴があるだろ？」

さっきドルクが見つけた穴だ。

「あの穴に行つて、生きて帰つて来い。・・・それが試練だ。」

「え?!」

生きて帰る、という言葉に、私たちは耳を疑った。穴の方を見ると、真っ暗で、少し気を緩めると吸い込まれてしまいそうだった。

「何なの、あそこは。」

シルムが穴を見つめ、静かに尋ねた。

「あの穴は、魔鏡の部屋、と言う場所だ。」

「「魔鏡の部屋?」」

三人の言葉に、深く頷くと、キースは続けた。

「あの穴には、私たちの闇の感情が閉じ込められている。入ってみないと分からないが、その閉じ込められている感情とは、嫉妬、憎しみ、そして恐怖だ。」

3人が息を飲むのと同時に、風が吹いてきて、火が大きく揺れた。全員が一斉に風上の方を見ると、そこにはあの穴があった。闇の向こうから、風が吹いてきた。

「気をつける、あそこは神の領域とも言われている。油断すると、

死ぬぞ。」

「キースは・・・キースは、行った事、あるの・・・？」  
「さあな。」

私は穴の前に立った。一番右の穴。シルムも、ドルクも、穴の前に立っている。しかし彼等は、涼しい顔をして穴の中に入っていた。

（急がなきゃ・・・。。。）

私は、半ば泣きそうになりながら、一歩踏み出した。

## 19 3つの穴（後書き）

アレン…ビクティニかあ……。新技も使えたりするのかな？

クレディア…それってこの事？ 『Vジェネレート』！！

アレン…どわっ！！ 熱っ！！

炎タイプ最強技……。らしい。

カガリ…映画か（汗 見に行くのか？

もちろん！！

カガリ…もう中学生なのに（汗

## 20 正と悪の死闘（前書き）

今回で、修行も終わるよ!!

アレン…早っ！ でも今回長っ!!!!

アレン達も、成長していきます!!

それでは第20話、スタート!!

## 20 正と悪の死闘

「何だ・・・？」

静かに呟いてみて、驚いた。声が響いて、自身の体にも痛いほど響いてくる。辺りは一面の闇で、まるで宙を浮いているような感じがした。振り返っても、来た道はやはり見えない。

（あれ？ 俺・・・。）

不意に、何かを思い出しそうになった。片頭痛がする。寒気がして、足元を見るが、暗すぎて見えない。

ガサツ・・・

「誰だ?!?!」

後ろから物音がした。振り返るが、そこにはただ一面に闇のみが存在している。闇。聞かない。でも、誰かがそこにいる気がした。

「隠れてないで、出て来い!!!!」

‘・・・ずるいよ・・・’

突然、声がした。空間一面に響いて、何処からかは分からない。しかし、聴きなれた声だった。

「シルム?!?!」

‘ドルクばかりで・・・ずるい。’

始め、幻聴かと思ったが、違う。これは確かに、あの、いつものアイツの声。

‘何で？ どうして？’

「どうしたんだ、シルム?!?!」

俺は前に一歩踏み出した。そこにいる気がした。声の主が。しかし、前足に痛みが走った。目を凝らしてみると、引掻かれた跡がある。

‘ざまあみやがれ。’

「何・・・だっつ?!?!」



闇の中から、次々に空を切る音がした。その度に、体に痛みが走る。  
‘そのまま、死んじゃえよ’

・・・違う。これは、シルムの声じゃない。アイツが、今まで色々な事を共に乗り越えてきたシルムが、そんな事を言う筈が無い!!  
「シルムは・・・そんな奴じゃねえ!!! アイツは、きつと、俺の事を、信じてくれてる。だから・・・俺も、アイツを信じる!!!」

その瞬間、ガラスの割れる音がした。まるで・・・そう、‘時渡り’が、破られたときみたいな。そして、闇が一気に萎んでいく。

「な、何だ?!?!」

目の前は、いきなり真っ白になった。

「あれ・・・? シルムさん?」

修行から、一番早く帰ってきたのはシルムだった。

「どうだった?」

クレディアが顔を覗きこむ。

「うん・・・何だか不思議なところでさ・・・。入ったら頭がくらくらしたんだ。」

「神の領域だからな、あそこは。」

キースが顔を顰めた。シルムは続ける。

「それで、いきなりドルクの声がしたんだ!! 何だか憎いとか呪ってやるのか言い出すんだよ。だから、オイラはすぐにドルクじゃないって思ったんだ。そしたら、急に眩しくなって……。」  
沈黙が広がった。キースが思いついたように顔を上げる。

「お前の入った部屋は、恐らく、‘憎しみ’の部屋だ。だとしたら……!!」

考え込む彼女の顔が急に深刻になる。

「どうしたの？」

「いや……、何も。」

キースが首を振ると、背後から音がした。爆発音だ。

「ドルクの行った所だ!!」

「行ってみましょう!!」

4人は走って中央の穴に入っていく。

「危なかった……。」

そこは崖の様になっおり、ドルクの目の前には、ものすごい勢いで流れる滝があった。あのままだったら、きっと落ちて、気絶どころじゃ済まなかったかもしれない。

「でも……。」

不思議だった。全身に力が漲ってくる。先程までのボロボロの体も、あつという間に治っていた。

「すげえな、ここ。」

「ドルク!」

「皆!」

「どうだった?」

俺は、ついさっきまでのことを、詳しく話した。

「と言う事は……ドルクは、‘嫉妬’の部屋に行ったのだな。」

キースは何やら考え込んでいる様子だ。

「アレンは、‘恐怖’の部屋ですね……。」

グリソンが右の穴を見て呟く。

「無事だといんだけど……。」

アレンは、闇の中にいた。

ここは……何処？

そうだ、確か修行で……

あれ……？

何も、思い出せない……

何も……分からない!!

……でも……何でこんな事ははっきりと分かるんだろう？

ここには……何も……無くて……

怖い!!!

誰か・・・ポエル・・・ライオ・・・先生・・・助けて・・・！！

このままだと・・・消される！！

アレンの中を、‘恐怖’、と言う感情が支配していく。目を見開いて動かない彼女の耳に、声が聞こえた。

<おい・・・小娘・・・。>

「誰？」

<我等を・・・ここから・・・出してくれ・・・。>  
力を振り絞って声の方を見ると、石が2つ、闇の中ではつきり輝いている。

「苦しい・・・の・・・？」

<ああ。体がバラバラにされそうだ・・・。早く・・・してくれ・・・。ここから我等を出してくれたら・・・お前も・・・助けてやる・・・。>

声の主は声を絞り出すように話している。闇の中で、唯一その光は、暖かい物だと思えた。アレンが手を伸ばす。その手は、2つの石をしっかりと掴んだ。

「！」

辺りが、突然真っ白になった。

右の穴から、また、爆発音がした。

「アレンが・・・やったのか？！」

ドルクが身を乗り出す。

「待て。」

キースが目を凝らして穴を見つめている。松明の炎が、風も無いのに揺らぐ。暗闇の中から、人影がゆっくり歩いてきた。

「アレン！！！」

「無事でしたか!!」

「アレ……?!!」

キース、いや、アレン以外のポケモンたちは、皆、次の瞬間声が出なくなっていた。洞窟から出てきたのは、アレンだけではなかったからである。

「ん? どうしたの、皆?」

「アレン、後ろ!!」

アレンの背後には、巨大な2つの影。

「れ、レシラムと……」

「ゼクロム……!!」

そう、紛れも無く彼女の後ろには、伝説のポケモンが立っていた。アレンもようやく気がついて、目を見開いて硬直した。

「助けを呼んでた、ポケモンさん?!」

『その通りです。私たちを助けてくださり、ありがとうございます。』

『

レシラムがお辞儀をする。アレンは照れて頭を掻いた。

「どうということだ?」

キースが顔を顰めた。アレンは笑いながら答える。

「なんか、あの部屋に閉じ込められてみたいなんだ。それを、私が助けたってわけ。」

『そういう事じゃ! 俺らは敵じゃないけん、安心しんさい!』

ゼクロムがキースに微笑んだ。キースも安堵の息を漏らす。

『ところで……アレン、だったかいの?』

「何?」

『俺達を、仲間にしてくれんか?』

アレンが目を見開く。ゼクロムは少し照れたように顔を反らす。

「ええっ?! それってつまり、‘召喚’って事?!」

『そうです。』

キースたちは驚いてその場に座り込んだ。アレンはジャンプして喜んでる。

『あの・・・私たちに、名前をください、主人。<sup>マスター</sup>』

「ええ？ いいの？」

『勿論！』

アレンは、2匹をまじまじと見つめた。波導眼には、黒と白の彼等も、水色の稲妻と赤い炎に見える。伝説のポケモンだけあって、波導もかなりの量だ。

「・・・よし！ 決めた！！」

アレンはゼクロムを指す。

「お前は、‘雷吉’！！」

次に、その指はレシラムを指した。

「お前は、‘炎丸’！！」

『雷吉・・・かあ。うん、気に入った！！』

『良い名です。』

2匹は笑った。

修行を通して、少し成長した3人だった。



## 20 正と悪の死闘（後書き）

ここでやっとタイトルっぽくなってきました。

うん、とりあえず・・・アレンのネーミングセンスカオスWW

炎丸..そうですか？ 私は結構気に入りましたけど。

雷吉..俺も♪

ここでクイズです！

雷吉の訛りは私の生息地の言葉なのですが、さて、私は何県に住んでいるでしょう？

分かった方は感想で書いてください♪

あ、別に、個人情報とかは気にしてませんので♪

雷吉..待っとなるけんな！



## 21 交戦（前書き）

遅れましたが更新です！

カガリ…今回は

フォック…俺たちの出番だな♪

そうです！

それではスタートっ！！

## 21

## 交戦

その頃・・・

ソウリュウシティでは・・・

「4代目頭領?! どういうことですか?!」

ライオは叫んでいた。

ソウリュウシティシャドー4代目頭領、ダーテングのキリマに。

彼が任務を終え、帰国した時に聞かされた事実は恐ろしい物だった。

「仕方がない事だ。もうこの状況は避けられん。」

キリマは外を見ながら呟いた。ライオは拳を強く握り、奴を睨みつける。

「確かに俺の故郷はここですが! 俺はサンヨウのシャドーに所属しているんですよ?!」

「・・・・お前は何だ、戦をやめろと言うのか?」

「原因を聞いているのです!!」

ライオはそういうなり書斎をバン、と叩いた。その音にキリマは振り返り、ライオに鋭い視線を向けた。ライオも彼を睨む。真上に輝く太陽を雲が覆っていく。沈黙が広がった。

「ヤツラに、人質を捕られたのだ。」

「？」

キリマの視線は外に戻っていた。書斎から一枚の紙が落ちる。拾い上げてみると、見覚えのある顔。

「そいつを、人質に捕られた。それだけではない。・・・ヤツラは金を奪い、ソウリュウ北地区の罪の無い人々を次々と殺していった。」

「?!！」

ライオはキリマの背を凝視した。その背に、シオラの背も浮かんで2つの影が重なる。そんな事をするはずが無い。あの、強く、正義感に溢れた人が。

「わしも、そんな事をシオラが命令するはずがない、と思った。・・・だが、事実は、事実だ。」

ライオは頭領の言葉を聞き終わらぬうちに駆け出していた。空は曇っていた。

頭に、同じ小隊の顔が浮かぶ。

アレン・・・ポエル・・・カガリ・・・

俺が、止めなきや

俺が止めなきや、誰が止めるんだ・・・?!

彼は走った。

いつの間にか雨が降っていた。静まり返った書齋で、キリマは一人  
呟いた。

「時既に遅し……。」

「キリマ様。」

彼の背後に、ふわりと影が突然舞い降りる。‘瞬身’、という技であ  
る。

「襲撃の準備、整いました。」

影は仮面と毛皮に身を隠していた。

「よし、攻撃開始だ。」

「は。」

キリマは目線を変えず答えた。影はその場から去った。

ソウリュウのシャドーが一斉にサンヨウへ向けて進みだしていた。

サンヨウシテイ

「何だど?!」

シオラは突然の報告書に驚いていた。その報告書は暗殺部の者から  
で、中身にはこう記されていた。

—これより襲撃を開始する—

シオラは軽く舌打ちをして顔を顰めると、手紙を破って捨てた。

「シ、シオラ様?!」

「なんて書いてあったんだ?」

シオラは顔を上げた。

「先程の情報はガセだ! 今からお前等は住民を避難させ、戦闘用意だ! ヤツラが、来るぞ!」

「「!」!」

カガリとフォックはシオラを凝視していたが、すぐに町へ出た。

「よし、全員避難したな?」

「ああ!」

カガリとフォック、そしてサンヨウシャドーが町に集結していた。シオラは住民の守護にまわっている。

(アレンもキースもいないこんな時に……。)

カガリが顔を顰めた、その瞬間だった。

「敵です!!! それもものすごい数です!!!」

探知係が叫んだ。カガリが指揮を執る。

「全員持ち場について卍の陣を作れ!!!」

「はい!!!」

カガリはフォックとポエル、そして第12班の隊長、ドレディアのチクバと卍の陣を組んだ。突然周りが砂埃に包まれ、土砂降りが襲ってきた。視界が一気に悪くなる。

「ボク達にとってはちよつと不利ですね・・・。」

ポエルが目を擦りながら言った。するとチクバが任せてください、と言う。

「『日本晴れ』!!!」

砂埃が消え、土砂降りも無くなり、空には太陽が現れ一気に快晴となった。

「私はアシストをしますね!」

目の前には敵が迫っていた。あの視界の中だったら、確実に殺られていただろう。カガリは左の、波導眼、を開眼させた。

（やはり・・・な・・・。）

彼女の体内には、‘飛行’タイプの波導が流れていた。

（状況はこちらに傾いているらしいな。）

カガリはしばらく考える顔になり、前を向き直って言った。

「持久戦になる。技の使いすぎには注意しろ……。まずは遠距離攻撃だ！ オレに続け！！」

「おう！」

カガリは両腕を真っ直ぐ伸ばした。左腕の包帯が解け、奇妙な印が浮かび上がる。

「何だ、あれ？！」

「この世でカガリさんのみが持つ、プリズムアーム無敵の左腕、です。全ての属性の力を持っているんです。」

「へえ……。」

カガリの腕の目の印が緑色になった。チクバが慌てて構える。

「アシスト！ 『蝶の舞』！！」

「『草の究極奥義 爆植』！！エナジーヴォルテージ」

カガリの腕から緑色の細い光線が飛び出していく。敵に衝突すると爆弾のように弾けた。

「今の技は……？」

ポエルがチクバの顔を見上げる。

「下手をすれば原子爆弾をも超えるほどの破壊力を生む技です。最も、今は秘術として扱われ使用できるのはこの世で一人しかいません。」

ポエルはカガリの背を見つめた。彼は何も言わずただ前を見ている。

「彼は決して自分の力を誇示したりしません。そういう所が、皆に慕われているのですよ。」

チクバの声を聞きながら、ポエルはカガリを見つめていた。

「すげえな、よし、俺も行くぜ！　まずは『ブラストバーン』！！」

フォックは高密度の炎を敵軍に投げる。

遠方で一気に爆発し、熱がここまで伝わってきた。

「皆さんいい調子です、『剣の舞』！！」

チクバは全員的能力を只管上げている。攻撃をしても敵はやはり進軍しており、明らかに距離は縮まっていた。

「接近戦だ！！」

カガリが叫ぶのと同時に、敵が一斉に仕掛けてきた。

### 竜螺旋の塔

「オイ、ギオン。」

「ああ？！　なんだよ、ハイド？！」

ハイドは薄笑いを浮かべ、ギオン達に近寄ってきた。チハルは旅行に行っていて、ルーンは研究に没頭していたため、2人はこの頃かなり暇な時間を過ごしていた。

「面白い事ニナッタ。」



ハイドは笑いながらそのままアレンの水槽へと近づく。

「シャドーノ飼イ犬共ガ、戦ヲ始メタゾ。」

それまで寝転がっていたギオンは飛び起きた。

「はあ?! まさかまたお前が仕掛けたのかよ?!」

「アア。オ前等ガライコウヲ捕獲シテイル時ニ、少シ殺ツテキタ。」  
ハイドはアレンを見つめて静かに言った。ギオンは呆れている。

「全く可哀想だな。お前のせいで命を失う羽目になる。」

「騙サレル方が悪いノダ。」

そこまで言うと、ハイドはギオンの方を見た。

「ドウダ? 見ニ行クカ?」

## 21 交戦(後書き)

フォック…って事は何だ、全ては円盤野朗の仕業だったのか?!

うん・・・(汗)

ポエル…酷いなあ(怒)

チクバ…これは勝つつきやないですね♪

カガリ…これからだな

次回はバトルばかりになると思います  
皆には暴れてもらわないと!

それでは♪

## 22 vs 4 闘士!! (前書き)

今回はカガリの戦闘シーンです!

カガリ…おっ♪

カガリ先生ってか弱い感じだから、強いトコを見せてあげないとね♪

## 22 vs 4闘士!!

「おおーやってるやってる♪」

土煙が巻き上げられよく見えないが、下では乱戦が起こっていることだろう。これをハイドが起こしたとは、少し信じがたいが、いい暇つぶしだ。

ギオンは崖の上から町を見下ろしていた。しばらく彼等を見ていたギオンは、視線を少し変えた。

その先には、2つの‘クレーター’が、見るも残酷に跡を残している。

（こっちはあの手配書レッド・リストに載ってたダークライがやったんだよね・・・）

大きな穴の横には、数百匹かのポケモンが転がっている。殆死んだように動かない。

（一撃でこの数か・・・。ザマアねえ。・・・にしても・・・あのリザードンも要注意だな・・・。）

ギオンは眉間に皺を寄せると再び視線を乱戦に戻した。燦々と照る太陽の下、痛みに悶えながら戦う奴らを見ると、全身に鳥肌が立ち、殺生の衝動に狩られる。

「フン・・・。精々俺を楽しませてくれよな・・・。」

カガリたちは目の前の敵を凝視していた。あちこちで戦いが始まり、土煙が上がったが、その姿ははっきりと映る。

「こ・・・こいつ等は・・・、ソウリュウの4闘士・・・!!」

目の前には、ハッサム、ハリテヤマ、テツカニン、バクーダの4匹が立っていた。

この4匹は、暗殺部に所属する、最強と謳われたシャドー達だった。ポエルは息を飲む。4匹は一瞬消えたかと思うと、カガリ達の目の前へ出た。

「あなた方も4人、こちらにも4人。一対一で行こうじゃありませんか。」

カガリの前へ出たハッサムが奇妙に笑う。カガリは目を細めた。

「皆、好きなだけ暴れて来い。」

合図と共に全員が散る。戦闘開始の印だ。ポエルはハリテヤマ、フオックはテツカニン、そしてチクバはバクーダと向き合って構えている。カガリが周りを見渡していると、注意を引くかのようにハッサムが口を開いた。

「光栄な事です。」

カガリはハッサムを見た。彼の力量は、波導眼で見る限りかなりの物だ。

「一度は5代目頭領として名乗り出た貴方と、戦う事ができるなんて……ね。」

「……………」

カガリは話に耳を傾けつつ、攻撃を構えた。相手も相当の実力者、隙を見れば殺られる。

「まともにやった所で私に勝ち目はありません。なので……」  
ハッサムはそういいながらポーチから何かを取り出した。小さい粒だ。

「これを、持って来ました。」

彼は、そう言いながらカガリに粒を見せ付けた。

「そ、それは……?!」

丸く、小さくて少し桃色があった、まるで錠剤のような粒。カガリはそれに見覚えがあった。

「秘薬の……ポテンシャル・ステロイド P・S, !!!」

カガリが動揺しその薬の名を言うと、彼はニヤリと笑った。そしてその薬を口へ放り込む。

「自分の寿命と引き換えに、最高の力をくれる薬!!　これがあれば、貴方など相手ではない!!」

彼は高らかに笑う。その声は周りの崖に響き渡り、不吉な音色と化

した。カガリは彼を睨みつけ、必死に冷静さを保っている。

あの葉は、‘麻葉’と称され、この世から消し去られたはずの物だった。一つ飲めば腕力が10倍に、二つ飲めば波導が膨張し、自分では制御できない程のエネルギーを生む。

正に、ポテンシャル‘P’ステロイドを引き出す最強の‘葉’……

処分された筈の物を、何故彼は持っている？　そもそも‘ソウリュウの4闘士’という正義の名は表だけの話だったのか？

「行きますよ！！」

極限まで力を引き出された彼の腕が、カガリを襲う。カガリは次々に飛んで来る彼の拳を何とか交わしている。当たれば気絶では済まないパンチをかわしながら、彼は考えていた。

（なるほど……。この葉は、体の波導を逆流させる事で体の筋肉を活性化させ、そしてエネルギーを生み出していたのか。しかし逆流させる事により、体や脳、心臓などに負担がかかり、寿命を縮める原因にもなっていた訳だ……。）

「逃げてばかりですか？　‘3EP’の通り名にふさわしくありませんねえ……。」

2人は間合いを取って地面に着地した。

「確かに……このままじゃ……ちょっときついな……？」

カガリは微笑する。ハッサムは笑う彼に不快を抱いたのか、顔を陰

しくした。

「勝ち目など、はじめから与えていませんからね。・・・くたばって下さいよ?」

「このままじゃあ、ね。」

「はい?」

冷たい風が吹き渡る。風が彼を通り過ぎるのと同時に、左腕から、蒸気のようなエネルギーがあふれ出てきた。

「まさかオレがこのまま戦うと思っているんじゃないでしょ?」

カガリが言い終わると、左腕の印から衝撃波が発生した。衝撃波は辺りに渡り、誰もが吹き飛ばされそうになった。

「プリズムアーム 解禁、!!!!」

彼の腕は今までとは比べ物にならない程の波導を発していた。目の形をしていた印が巴形へと変形する。

「オレの戦慄<sup>タクテイクス</sup>つてもんをみせてやる・・・行くぞ!!」





## 22 vs 4 闘士!! (後書き)

ポエル..プリズムアームって、まだ隠された力を持ってたんだ...

フォック..俺たちも負けてられねえな!!

よし! そんなじゃあ次回はフォック先生のバトルだっ!!

お楽しみに!!

## 23 フォックの炎（前書き）

フォック先生、出番です！

フォック…待ってたぜ！

そして中盤から驚きの展開！

それでは第23話、

フォック…行くぜ！！

## 23 フォックの炎

その頃・・・

フォックはテッカニンと戦っていた。ポテンシャル・ステロイド‘P・S’を飲んだ敵の動きはとてつもなく速い。羽音が聞こえるだけで、姿は見えなかった。

「オイラの動きに、ついて来れるかな？」

奴はまだ本気を出していないようだ。笑わせる。

「なら、これはどうだ？ 『シエルブレード』！！」

周りを切り裂くと、背後に手応えを感じた。

「そこか?!」

振り返って『火炎放射』を放つ。虫タイプの相手には、かなり効いているはずだ。

「グアアアっ?!!!」

不意を突かれたテッカニンは、腕に火傷を負っていた。奴は怯んで間合いを取った。だがスピードが落ちればこちらの物だ。

「『大文字』!!」

相性のいい技で、一気に終わらせる!

「『身代わり』!!」

テッカニンは咄嗟に分身を出して逃げる。大量の炎が身代わりに命中し、分身は黒こげになった。しかしテッカニンの姿が無い。

「何処へ行った・・・？」

テッカニンは、すぐ近くの木の後ろに隠れていた。腕の傷が痛む。羽音は聞こえないようにしてある。火傷を負った時点で、物理、が得意なテッカニンにとってはやりづらい状況になっていた。

（見たこと無い奴だったな。それにあのパワー、何故、手配書<sup>ビンゴ・ブック</sup>に載ってなかったんだ・・・？）

「まあ、でもここに居れば絶対に・・・。」

「絶対に・・・見つからないってか？」

「！！」

振り返ると、そこにあのリザードンがいた。

「バレバレなんだよ！」

奴は剣を振り上げる。

『ブレイブブレイド』！！

激しい爆発音が、辺りに響いた。

（何が4闘士だ、この程度か。）

すると、背後から気配がした。振り返ってみるが、誰もいない。気のせいかな？ いや・・・。

「誰か居るな？！ 『火炎放射』！！」

炎は何も無い筈の空間を貫いた。

「『護る』！」

突然声がする。何も無い筈の場所なのに。すると炎が見えない壁によって弾かれ、辺りに火の粉となった散った。

「何者ナンデスカ？ 貴方ハ。」

透明な空間がねじれ、一匹のポケモンが現れた。種族はジバコイル。

「お前こそ、何者なんだ?!」

「私ハハイド。ソレデ、貴方ハ？」

彼は紳士的に挨拶をする。口調は丁寧だが、俺は奴が顔に浮かべた薄笑いがどうも気に入らなかった。

「俺はフォックだ。」

遠くで爆発音がした。カガリさんの方だ。彼等はまだ決着をつけていないらしい。敵と対峙しながら、カガリさんは叫んだ。

「奴は敵だ！ 油断するな、フォック！」  
「何っ?!」

俺は改めてハイドと向き合う。風が吹いてきて、視界に土が巻き上げられた。敵と分かった以上、戦うしかない。

「勝負、デスカ？ イイデショウ。受ケテ立チマスヨ。」  
「ニヤニヤしやがって・・・！ 行くぞ、『炎のパンチ』!!」

相性的にはこちらが有利だが、奴は驚きも怯みもせず構えた。両手の磁石を交差させる。先程見た構えと同じだった。

（くそっ、『護る』をする気か?! それならこっちにも考えがある!）

俺は片方の腕に2発目を準備した。そう、なるべく感づかれないように。しかし奴は違う動きをして見せた。

「『電磁砲』!!!」

黄色く光る電気が磁石に集まり、丸い球状になる。

そのエネルギー体は序序に膨張し、やがてジバコイルよりも大きくなった。

（こいつはやべえ?!）

エネルギー体がフォック目掛けて飛んで来る。慌てて身を翻し、電撃を受け流した。

『電磁砲』はそのまま真っ直ぐ地面にぶつかって弾けた。

地面に亀裂が入る。まるで谷ができたようだ。

アレを食らったらただでは済まない。

「相性では、お相子と言う訳か……。」

接近戦はキツイと判断した。

おそらく相手は電気技しか使ってこない。

それに、もともとリザードンという種族は特殊技の方が優れている。

「来ナイナラ此方カラ行カセテ貰ウ! 『連電波』!!!」

奴は構えない。

その代わり、まわりの地面が振動し、電気が溢れ出てきた。

「何っ・・・?!」

一瞬で周りを囲まれてしまった! 逃げ場が無い!

「ぐっ・・・!」

かわそうとすると、痛みが体を走った。電気によるものだった。立ち上がろうとするが、力が出ない。

「麻痺・・・した・・・?」

「ソウイウコトダ。」

ハイドが空から見下ろしてきた。

「こんなんです勝った気になるなよっ!!」

俺は立ち上がり奴を睨んだ。

「俺の本気・・・見せてやる!」



## 23 フォックの炎（後書き）

フォック..まさか戦う事になるとはな・・・しかし丁度いい、この  
際思う存分やらして貰うぜ！

カガリ..気になる展開だな・・・

麻痺状態という不利な状況ですが

フォック..そんな物関係無えよ！

だよね！

次回、2人のバトルです！

## 24 始まる激闘(前書き)

ハイドとフォック先生のバトル、どうなるのでしょうか?!

アレン..技が凄いもんねww

迫力あるバトルの展開です!

それでは24話

フォック..行くぜ!!

## 24 始まる激闘

「何だと?!」

キースが無線相手に突然大声を出したので、洞窟内のメンバーは一斉に彼女の方を見た。

キースは少し顔を顰め、目を合わせようともせず皆に背を向ける。

「分かった・・・ああ。急いで行く。それじゃ。」

プツツという雑な機械音が鳴り、無線を静かにポーチにしまう。

「皆・・・サンヨウで乱戦が起こっているらしい。」

「え?!」 「何だって?!」 「乱戦?!」

キースの言葉を聞いた途端に、ざわめきが起った。

アレンは雷吉達と目を合わせる。その瞳に蠟燭の灯りが揺らいだ。

「今からサンヨウに向かう。雷吉、炎丸。お前等の力を借りるぞ。」

『勿論。』

『分かつとる。』

2匹はお互いと顔を見合わせて深く頷いた。

キースは目線をドルク達に向ける。彼等は首を傾げつつも周りの変

化に少し焦りを感じていた。

「お前達・・・、厄介な事に巻き込んでしまつて、本当に済まない。」

キースは2人に深く頭を下げた。

異世界から突然やってきて訳の分からないままここにきて。

特訓に付き合わされて。

更に政治事情にまで巻き込まれる。

本当に迷惑もいい所だ。

だが彼等は笑って答えた。

「俺たちの事は大丈夫だ。それより今は、お前等の仲間を助けに行かねえと！」

「ドルクの言うとおりでよ！！ 戦争なんて、見過ごす訳には行かないよ。」

キースの目が少し潤んで、彼女の顔からも笑みが毀れた。

「「チームブレイブの名に賭けて！ 必ず戦争を食い止めてみせる！！」」

「ドルク・・・シルム・・・。」

2人の掛け声メンバーが勇気付けられた。

「それでは行くぞ！ サンヨウヘ！！」

一方サンヨウでは、ハイドとフォックのバトルが繰り広げられていた。

「『弔電磁場』！！」

「『無効の時』！！」

ハイドが放った蒼い雷を、フォックが時間を操り無効にする。空間に歪みが起き、雷が吸い込まれていく。

「中々ノパワーダ……。敵ニハ勿体無イ。」

「てめえが仕掛けたんだな、この乱戦を！！」

フォックが指を指した。

その先には、仲間達が必死に戦っている姿があった。  
何も知らないポケモンたちが、罪無き命を奪い合って戦っている。

「ダカラナンダ？」

ハイドはそんな光景を目にしながらも表情一つ変えずに冷たく言い放った。

「・・・許せねえ！！」

フォックが高温の炎を放った。

白いその火炎は猛スピードでハイドに向かっていく。

「マツタク。」

ハイドはため息を漏らすと片手を振り上げ炎を一瞬で消した。

1000℃を超える炎はその手が触れると同時に引き裂かれ、大量の火の粉となって辺りに散った。

ある意味横向きに発射された連発型打ち上げ花火のようにも見える。

「私ニ炎ハ効カナイと思ツタ方ガイイ。」

「だったらこれならどうだ？！」

フォックは素晴らしい終わらぬうちにハイドに向かって突進していった。

想定外の動きにハイドは目を細める。

「『時の停止』！」

「何?!」

叫び声と共に周りがセピア色に変化した。  
周りの風景が全て静止し、騒音が絶えなかった戦場が沈黙に包まれる。

(ん?!)

カガリは一瞬フォックの方を振り返り、そのまま影に隠れた。  
こうすれば時間に体が制御されることもない。ディアルガの召喚契約時に身に着けた業である。

(やはりな……)

あの時感じたディアルガのエネルギー。フォックはそれを体に取り込んでいる。

この技もそのエネルギーによる特殊な物だ。

カガリの『メテオ・ダイヤモンド時間停止』とよく似ている。

時間を操るには、体内で波導を極限まで高密度にし、その体内に別空間、所謂‘ブラックホール’を作り出す必要がある。

しかし波導を高密度にする事は非常に困難な技であり、仮に‘ブラックホール’を作り出せたとしても文字通り制御できずに異空間へ飛ばされ、そのまま帰らぬ人となる可能性が非常に高い。

それを成し遂げたのは今の所、先代の頭領、シャウロとその弟子カガリのみである。

ただ、ディアルガの波導を体内に取り入れたとなれば、危険な事をせずに技を発動できる上、スピードも格段に速くなる。

だが、やはりその力も自分で制御しなければエネルギーが逆流し飲

み込まれてしまう。

彼はその波導をよく使いこなしていた。

フォックはセピア色になった大空を舞い、そのままハイドの真上に回りこむ。

静かに剣を構え、そのまま急降下した。

「『光の剣雨』!!!」



## 24 始まる激闘（後書き）

ホントはこれで終わらせたかったんだけど・・・  
ちよつと長くなりましたww

アレン…フォックさんは時が操れるのかあ、凄いね！！

フォック…これなら円盤野朗も降参だろ♪まあそれで許すわけないけどな♪

だよね（汗）  
勝敗は次回だよ！！

## 25 最後の言葉（前書き）

アレン…いよいよバトルもクライマックス！…かな？

その通りだよ！

そして衝撃の結末が？！！

カガリ…過去にリンクしているみたいだぞ

実はカガリ先生の過去と少しつながりがあるんです、まだカガリの過去編（短編）を読んでいる方はそちらを読んでからの方が楽しめると思いますよ♪ぜひ読んでみてください↓

フォック…それより行くぞ！ 俺も早くこの勝負に決着をつけてえんだ！

ハイド…勝利ノ女神ハドチラニ微笑ムノカ、楽シミデスネ。

はい、それでは第25話スタートです！！

## 25 最後の言葉

(流石デスネ・・・)

高温ノ炎ニ剣ノ裁キ具合・・・

オマケニディアルガノ波導ヲ持ッテイタトハ、正ニ最強ノリザー  
ドント言ツタ所デショウ。

オカゲデ私モコノヨウニ囚ワレノ身ニナッテイル訳デス、ガ、命  
取りデスネ。)

フォックは剣を振り上げながらハイドに、いやこの空間自体に違和感を感じていた。

手ごたえが無い、というより時間が止まっていなような気がする。

「うおおおおおおおっ!!!!!!」

気のせいだと思いつつ、そのまま勢いよく剣を振り下ろす。  
空気<sup>クリーンヒット</sup>を切り裂く音と共に剣を光が包む。このままいけば致命傷だ。

（ハイドもこれで終わりか・・・。）

カガリは影の中で眩き、息を漏らした。  
頭の中にダイの声が蘇る。

‘・・・お前の目になって、これから未来みきを見てやるからよ・・・’  
，

（・・・オレは取れなかったが、あいつが仇をとってくれるみたいだよ・・・。）

カガリは目を閉じた。  
今は亡き友の思いを感じて。

しかし、信じられない事が起きた。

フォックが攻撃を躊躇ったのだ。

彼はハイドを斬りつける直前に剣の向きを変え、そのまま腹部に当たるはずの攻撃は頭部に直撃した。

鋼で出来たジバコイルの頭部は体の中で最も硬い。そのため、物理攻撃では傷も付かない。

案の定勢いよく振り下ろされた剣は頭部に当たって跳ね返り、回転

して地面に突き刺さった。

（?! 何故だ？ 何故躊躇した?! このままだと返り討ちにあうぞ!!）

カガリは身を乗り出して叫んだが、影の中に木霊するだけで、外界には伝わっていない。

これはハイドにとっても驚きを隠せない行為であった。

彼はそもそも攻撃を受ける前に‘召喚’を行って『森羅万象』を繰り出し返り討ちにするつもりだったのだが、奴の剣に迷いがある事に気づき、態とその行動をとらなかった。

勿論あの状態で『森羅万象』<sup>さくせん</sup>を実行していれば、奴は倒せていた。仮に倒せなかったとしても、状況は更に有利に働く。此方には、‘創造神’がいるのだから。

しかし、ハイドは召喚をしなかった。ハイドには思い当たる事があったのだ。

彼を殺してはならない、今このまま始末出来ない、理由があった。

もしかしたら彼が……

‘あの事’に気づいているのかも知れない。

フォックは肩で息をしながら、ハイドを見つめていた。その瞳は、先程の憎しみに溢れた物とは違っている。

「お前・・・本当は・・・。」

「・・・・・・・・。」

「悪い奴、じゃ、無いんだな？」

「!?!」

フォックの言葉にハイドは目を見開いた。

しかし、一瞬戸惑いを見せた彼は、再び冷静に構える。‘時の停止’が解除され、周りの色が元に戻り何事も無かったかのように戦いが始まる。

（オレも暇じゃなくなったな・・・。）

カガリの前には秘薬で格段に強くなったハッサムが構えていた。

「『波導召喚』……ギラティナ……!」

カガリが叫ぶ。

突然左腕に紫のオーラが漂い始めた。

波導召喚とは、通常の召喚とは別に、体内にその波導と感情だけを連れてくるという特殊な術である。

『久しぶりだな！ カガリの兄貴!』

「ああ。早速だが、一発頼む。」

今カガリの体はギラティナが操作していた。カガリ的心思もなく左腕がハッサムに向けられる。

『了解だぜ！  
メテオ・ブラチナル  
『異世界の鉄槌』……!』

カガリの左腕から龍の形をした波導が発射された。紫色に染まった暗黒龍は真っ直ぐに『標的』へ向かう。

「終わりだ。」

「ぐあああああああ……!」

「何ヲ言ッテイルノデス？　コノ私ガデスカ？　・・・笑ワセマス  
ネ。彼等ニP・Eヲ与エタノモ私ダトイウノニ・・・。」

ハイドは薄笑いを浮かべた。フォックは何も言わずにたっている。  
2人の間を風が通り抜けた。

（アイツはいい奴だったけど、悪い奴に、染められた、って感じた。  
まだ元に戻せるチャンスはある！）

フォックは相手と間合いをとって構えた。

だがその瞬間、ハイドに異変が起こった。

「ぐっ！！！！！！」

彼の顔が突然歪み、はあはあと息が荒くなる。宙に浮いていられなくなり、そのまま地面に落ちた。重みで地面に亀裂が走り、穴が出来た。

「なっ？！　どうした？！！」

「ガアッ・・・！！」

フォックが駆け寄って体を支えた。彼の体は何もしていないというのに傷だらけだ。彼は叫び続け、苦しそうに喘いでいる。心臓の鼓



動が一定のリズムを刻んでいない。

「しっかりしろ!!」

フォックは叫ぶが、彼は既に叫ぶ事も出来なくなっていた。

(ソナ・・・アレン様・・・!! 何故私ヲ・・・?!!)

ハイドはゆつくりと瞼を開けた。心配をするフォックの姿がぼんやりと見える。

本当に申し訳ないことをした。

ハイドはその彼の顔を見たとき、心からそう思った。  
視線を左に反らす。戦っている、何も知らないポケモンたちが見える。

右を見てみた。こっちも同じだ。

「フォック・・・。」

ハイドははつきりしない目で彼を見つめた。  
痛みからか、涙が零れ落ちる。体だけじゃない。心も。もう傷は癒えない。

「すまない。．．．本当に．．．だが．．．このまま死んでいくのは．．．嫌だ．．．。」

「どうしたんだ?! おい、死んじゃダメだ!!」

フォックの言葉を見捨て、ハイドは地面に手を突いた。残り少ない全ての波導を、指先に集中させる。

‘ 召喚 ’ ! ! !

煙と共に、アルセウスが出現した。

「レイム．．．。」

ハイドが神の名前を呼んだ。

『お前、昔のお前に戻ったみたいだな．．．。』

アルセウスがハイドを見つめた。フォックは息を吞んだ。戦っていたポケモンたちも、その場に縛られたかのように止まり、視線が釘付けになった。

「済まない．．．な．．．。お前にも．．．酷い事をした．．．実験だなんて．．．。」

『今更何を言っているんだ、お前は。それに・・・オレは・・・アイツが元気なら、それで十分だ。』

アルセウスの視線の先には、立ち尽くすカガリの姿があった。目を見開いて何かを話しているようだが、遠すぎて聞こえない。此方へ手を伸ばしてきた。

「大丈夫だ・・・アイツなら、やっていける。」

『ああ。そうだな・・・。』

走ってくる息子の姿を目に焼き付けて、創造神は目を閉じた。毀れた涙が大地に落ちていく。

（お前が果てるなら、契約者も同じく果てる運命にある。）

「やってくれるな？」

『ああ。分かっている。オレも全ての力を使う。』

アルセウスの体が輝きを放ち始めた。

『静まれ!!! 森羅療善!!!』

神々しいオーラが大地を包んでいく。それに触れたポケモンたちは、武器を手放し始めた。

「あれ？ 何で俺たち戦っているんだ？」

「そうね・・・何だったのかしら・・・」

「止めましょうよ、戦争なんて。」  
「そうだな！」

ハイドはその言葉を耳にすると、傷だらけの体で微笑んだ。

「フォック・・・ありがとう・・・な・・・。」

「・・・ああ。」

フォックはもう叫ばなかった。こうする事が、彼の選んだ選択だと分かったから。  
そしてこれが彼の最後の言葉となった。

『民に平和在れ！』

召喚されたアルセウスも、契約者が力尽きるのと同時に光となって消えた。その光は、黄色い色を暖かく灯したまま、空へ上っていく。

「父さん・・・！！」

カガリが走ってやってきたときには、その光は一つ残らず空へ舞い上がっていった。

「終わったんだな。」

「ああ。」

フォックは立ち上がる。

「カガリ先生くっ!!」

後ろで声が聞こえる。破壊の爪あとが残る大地を、小さなりオルが走ってきていた。

## 25 最後の言葉（後書き）

フォック…ハイドも何だか色んな過去を背負ってたみたいだな

そうだね

次回、修行と戦い編も最後となります！

アレン…お楽しみに！

## 26 サヨナラはまた会える呪文（前書き）

久々に更新！！

アレン…フォックさん達ともこれでお別れかあ、なんか複雑。

シルム…複雑って（汗

コラボ編もこれでラスト！ さてみんなは元の世界に無事戻れるのか？！

それでは第26話、

全…スタート！！！！

## 26 サヨナラはまた会える呪文

「ったく。誤解だったとは・・・、とんだ失態だ。」

シオラは苦笑しながら額に手を当てた。

終戦してから既に3時間が経過していた。

シャドーによる修復作業が続く中、カガリ達はフォック達を元の世界に戻す手段を話し合っていた。シオラを囲んで班長達が頭を抱えていた。無理も無い。今回の時空間移動については前代未聞の出来事であったからだ。沈黙の中、キースが突然口を開いた。

「頭領。」

「何だ、キース？」

「私に考えがあります。よろしいですか。」

キースは強く言い放つ。その様子を見てシオラが苦笑した。

「流石はエリートだな、話してみろ。」

シオラが笑って言うと、キースはカガリを見た。

「カガリの召喚を使うのはどうかと。」

ざわめきがおこる。一方のカガリは立ち尽くしたままだ。それは何が起こっているのか解らないというより、キースの発言に疑問をもっているようだった。



（キースはディアルガを使う手を考えたようだが、それだと時間移動をするだけで解決には繋がらない……。パルキアだけでも同じような現象が起これと考えられる……。時間と空間、二つの力を結合させるのも父さんしかできない。どうするつもりだ……。？）

「召喚獣を使うのではありません。召喚術そのものを使って、フォック達を元の世界……。いや、次元に返します。」

（！！……その手があったか……。！……。いや……。しかし……。）

「……。うむ、確かに時間と空間、それを超越し元に戻る事は可能だ。だがそうするには契約と、戻る場所を指定しなければならん。」

シオラが腕組みをしたまま言う。その額に皺がはいる。

（シオラ様の言うとおりで。だが、キースもその事は知っている筈だ……。何か策があるらしいな。）

そのとき、

キースの口元がいきなり歪んだ。その口先は歪んで歪んで、不敵な笑みを作り出す。

そう、まるで宝を見つけた海賊のように……。悪戯を企む子供のよう……。。

「そこに、居るんだろ？ いい加減姿を現せ。」

「かくれんぼは、終わりだ。」

一閃。

そう表すのに等しかった。

キースの左腕から放たれ、シオラの背後の柱に勢いよく突き刺さる。  
‘ハードプラント’

ツタージャである彼女が繰り出した異形の技は、だれの目にも留まらなかった。

そして

本来何も居るはずの無い柱から、うめき声が聞こえる。

透明の影が動き、姿を現し始めた。

「やッ・・・止めてくださいッ！！」

「言え。手前、知ってるだろ。」

キースは表情を陰しくした。左腕に力を込め、振る。たったそれだ

けの動作だというのに、凄まじい衝撃が発生し、玩具のように天井が吹き飛ぶ。

カガリの隣にいたアレンは、そんな彼女を凝視した。先程までの優しさは微塵も感じられない。

衝撃波が拡散し、アレンは咄嗟に身構えた。

「そッ．．．それだけワッ！ かかか勘弁ヲををを．．．！！！」

相手が否定の意思を表示するや否や、キースは針状に尖らせた木を首に巻きつけ、勢い良く締め付ける。

「手前の事は知っている。現在蠢きつつある組織‘台風’の一人、ルーン。主に移動術を使うそうだな。先刻から我々の後を付けていたようだが、手前だな。時空間移動をしたのは？ 応えろ。死にたいのか？」

[illegible]

「（こいつ、鋭い女だな・・・。）はッ・・・ハッはい言います言いますうううううう！！！！」

(1798nwy76地点・・・。)

この番号は所謂緯度・経度を示す物だった。カガリは目を閉じ、場所を特定する。

‘世界把握能力’

これがカガリがアルセウスから受け継いだ唯一の能力であった。

「カガリ、どうだ？」

「・・・解りました。それでは・・・転送します。」

転送が始まった。

‘別次元の者’がカガリの前に並んでいる。

「ここでお別れか・・・いろいろあったが、結構楽しかったぜ。ありがとうがとな。」

フォックが呟いた。その顔は笑顔だったが、嬉しそうではなかった。無論、ドルクとシルムでもある。

「お前等・・・帰れるんだからさ、もっと嬉しそうな顔しろ・・・」

一方のカガリも同じ笑顔だった。アレンは唇を噛んで涙を堪えている。

「ドルク・・・シルム・・・あっちの世界でも・・・頑張っ  
て・・・ね!・・・」

「ああ。アレンも任務頑張れよ! それと、ダークライにもいい奴  
が居るって事、理解しとくぜ、・・・えっと・・・カガリ、だっけ  
か?」

「フフ・・・どうだかな。向こうのダークライにも言っ  
てくれ! それからまた、会いに来い。」

「契約は結んだんだから事実上、此処にはカガリが呼び出す  
ことができる。」

こんな時だというのにキースは冷静に言い放った。

「それじゃ・・・始めるぞ・・・。」

カガリの両手から蒼い光が出現した・・・。それはゆつくりと、ボ  
ールのように三人を包み込む。

・・・筈だった。

「?!?!?!」

急に光は熱と雷を帯び始め、空間を歪め始める。

「け、景色がっ・・・歪んで・・・?! 何が起こってるんだ・・・?」

アレンが目を擦る。しかし周りの景色は回復する所か、ますます歪んでいく。

海の波のようになった空間に、黒い雷が走る。

「オレの力だけではっ・・・転送できない???!!!!」

「何だど???!! どうすればいいんだ?!!」

シオラが歪んだ空間で叫んだ。辺りが暗くなり、いきなりブラックホールの中に落ちたような感覚がおそってくる。

「このままだと・・・っ! 戻れなくなる!!!」

「アレン! 力を貸してくれ!!!! 他に召喚術が使えるのはお前しか居ない!!!!」

「え・・・。」

アレンはいきなりの事で曖昧な返事をした。

「アレン!! 早くッ!!」

良く解らないけど・・・三人のためなら!!!

アレンは暗く重い空間に両手をつく。そこが地面かはわからないが、何かが指先に触れ、全身に伝わってくる。

「雷吉！ 炎丸！ 力を貸して！！」

アレンがそう叫ぶと空間からゼクロムとレシラムが出現する。

（いつの間にそんな力を・・・）

伝説の二体を繰り出すアレンに、シオラは驚き、そして優しく微笑んだ。その目は、幼いアレンの将来を見据えていた。

『久々じゃのう！！ ちっとは気合出してみつか！ って、何じゃこりゃ？！！』

『これは酷いですね。状況は理解し兼ねますが、急いでいるのは確か。雷吉、いきますよっ！！』

『おう！ 何でもやっちゃるわ！！』

「ありがとう！ じゃ、いくよ！！！！！！」

体に力を込め、イメージする。召喚のイメージを。送り出すイメージを。

（ずっと居て欲しいなんて、思っちゃいけない・・・帰してあげないと！二人を！！）

エネルギーは結合し、共鳴し、三人を包み込んだ。フォックたちの足が透き通り始める。

「これで・・・ほんとにお別れだ！！ 最後まで忙しかったな！！ 今度は俺たちの世界へ招待するぜ！」

「オイラたちも！一緒に組んで依頼をしよう！！」

「ありがとう！！！」

光は強まり、目の前が見えなくなる。波導が、遠くへ、遠くへ宙の上へ上がっていった。

ありがとう・・・ありがとう・・・そして・・・

さようなら。



## 26 サヨナラはまた会える呪文（後書き）

アレン…行っちゃった・・・

カガリ…何だか急に寂しくなったな。

盛り上げ役もしててくれたから・・・

アレン…この空気苦手・・・でも、また会えるよね?!

もう会ってるよ・・・（汗）

それはともかく!

次回から新章に入ります!

まだ走っているライオ君、キミもでるから安心してね!!

ライオ…死ぬ~~~~!!!!  
いつまで走らせてんだもう筋トレと  
かのレベルじゃねーぞ?!!!

・・・・・・（笑）

ライオ…きいてんのかテメーツ?!!!  
返事をしろーっ?!!!!!

## 27 始まる(前書き)

さあて!! 新章スタート!!

アレン..今回も凄いことになりそうだな!

そのとおりっ!

それじゃ、第27話ぶつとばして行こう!!..!

## 27

## 始まる

「色々あったが、とりあえずは任務に行くとするか！」  
カガリが巻物を広げ言った。

「先生、今回の任務は？」

アレンが待ちきれず訊ねた。  
空が、笑えるほど真っ青だ。

昨日は夜大雨だったため、サンヨウシティには所々水たまりができていた。

「今回の任務は・・・」

巻物を凝視して、喋りかけたカガリが突然黙り込む。

「これは・・・、」

様子に気づいたアレンとポエルも、慌てて駆け寄ってきた。

「どうしたの、カガリ？」

「今回の任務は、ちょっと厄介そうだよ。」

そういうとカガリは巻物を丁寧にポーチに収めた。  
そして突然勢いよく地面に手を付ける。

「こいつがいないと任務が始まらない・・・召喚，！！！！」

突然の事に呆然といていた2人だが、召喚をするや否、白い煙が辺りを包んでいく。

眩しかった日の光も、呆気なく見えなくなった。

突然、「ボン!」と音が鳴り、周りがさらに暗くなる。どうやら何かを呼び出したようだ。

（もしかして、この前のディアルガ・・・?）

アレンはふと、カガリのディアルガを思い出した。

あの時を震わすような、厳かな声が聞こえてきそうだったのだが・

・  
呼び出されたのは、意外な人物<sup>ポケモン</sup>だった。

『カガリの兄貴!! 久しぶりっスねえ!!!!!!』

「ギラティナ・・・?!」

ポエルが眩しそうに見上げながら言った。

煙が晴れて、太陽の光が棒のように降り注いでいく。

やがて次第にはっきりと目に映る、灰色の体に黒く大きな翼……。

その姿は、まぎれもなくギラティナだった。

世の中では、‘アナザーフォーム’と言われる姿で。

「久しぶりってなあ、この前呼んだばっかだろ？」

カガリはその姿を見て首を振ると、静かにため息をついた。

ギラティナは、以前戦争が起こった際に召喚していたのだ。

『ううっ、そんな事言わないでくださいっスよう……。召喚つたって、前のは波導召喚だったじゃないっスかあ』

ギラティナは少し涙目になって言う。

波導召喚とは、本体ではなくそのポケモンの波導と感情だけをつれてくるといふ術である。

（弱っ！　つか泣き虫だなこいつ）

アレンは心の奥で衝撃を受けていた。

ディアルガとは大違いだ、頼ってもいいのだろうか。

『でもカガリの兄貴がオイラを丸ごと連れてきたってことは、何か用事があるんスよね？　見たところ勝負してるわけじゃないみたいだし……。』

ギラティナは辺りをきょろきょろと見回す。

サンヨウシティはシオラの手によって完全修復されているので、現在はいきれいな街並みが広がっていた。

灰色のマンションの数も前よりも増え、以前よりも街は画期的になったように見える。

『（にしても綺麗になったっすねえ……。流石シオラさん。オイラの所も、こんな感じにして欲しいっす。）』

「おい、何ボーツとしてんだ？」

『ハッ。』

カガリの声で、ギラティナは気を取り戻す。

「今回の任務は、お前の世界で行う。」

そう言いながら、カガリは灰色のタイルのうえに巻物を広げた。

アレンたちはそれを覗き込む。

写真の所には、‘ポリゴンZ’というポケモンが載せてある。

ポエルが任務内容を読み上げた。

「えーと、“突然見知らぬ世界に迷い込んでしまいました。しかも何者かが襲い掛かってきます！ 助けてください！”・・・って、見知らぬ世界？！！」

「見知らぬ世界って・・・」

「ああ。」

カガリが頷いた。

一方で、ギリティナが首を傾げる。

『おかしいっスねえ、オイラが来る前には誰も侵入者なんていませんでしたけど・・・』

そんな彼らに風が吹き付ける。

（あれ？）

アレンが、ふと空を見上げた。物凄く遠い場所で、波導が、何かが蠢いた気がした。

しかし、視線の先には、ただ青い空が広がるのみ。頭の中を何かが掠める。

だが、彼女はまだ気づかない。

それが、“嫌な予感”であることも、

その予感が的中しているということも・・・

「今回の任務は、破れた世界・・・即ち、反転世界、で行う！  
」

同時刻      花咲くライモンシティ

「任務、割と早く終わったな、レイ。」

一匹の茶色のスカーフを巻いたりザードンが、背後のアブソルに言った。

「ああ。」

アブソルが頷くと、リザードンは片手に握っていたドリンク、‘ポケダミンX’を、グビグビと飲み干す。

「・・・かーっ！！ 仕事の後のこいつはこれまた格別だな！！」

「また飲んでんのか・・・と言いたところだが、今回はお前のお蔭で片付いたからまあ、今回は許してやろう。」

アブソルが呆れながら呟いた。

ぶらぶらと歩いてるうちに、彼らはテーマパークへと入っていった。イッシュで最も人気のあるテーマパークだ。



此処しか楽しめないアトラクションも数多く存在するので、毎年お客で一杯になり、どのコーナーも一時間以上は待つはめになる。今日は平日だからかシーズンの行く気になっていないのか、偶然にも人は少なかった。

「憧れのパーク・ライモンにやってきたぜ!! さあレイ! 何に乗るか? スペクタクルなライドか? それともスリリングなジェットコースター? ロマンチックな観覧者でもいいな! って、レイ?」

ハイテンションなりザードンの隣で、アブソルは自棄に冷静だった。まるで周りの景色も目に映っていない。

(この風・・・もしかして・・・!!!)

「すまない、ライ! ちょっと行ってくる、そこで待っていてくれ!」

「あ、あ、おい!! どこ行くだよお!!」

(帰ってきたか、氷牙様・・・・・・・・!!)

アブソルは駆け出した。

ただ一つの目的地に向かって・・・

彼もまた、知る筈もない。

これから世界を揺るがす事件が起こることも、その事件の被害者になってしまう事も・・・

同時刻      ？？？

「なんだ・・・これは・・・?!」

少年、ブイゼルは恐ろしい光景を目にしていた。

目の前には、無様に転がる死体、死体、死体。

ある者は首が折れ曲がり、ある者は肢体が無くなっている。

だが、それだけではない。

死体の山の上に、さらに大きなポケモンが、倒れていた。

恐らく、自分の7倍ほどの大きさは易々と超えているだろう。

「何なんだよ・・・。」

彼もまだ、知らなかった。

このポケモン達は、奴のための‘犠牲’になったことも・・・

これから、恐ろしい事が起きるということも・・・

同時刻      ？？？

「ど、どうして・・・う・・・らぎ・・・た・・・？」

横たわるポケモンが、2匹。

奥に鮮血に染まるポケモンが、1匹。

「フハハッ！！ 君たちには本当に感謝しているよ！！ お蔭で全  
てそろった！！ 時は満ちたんだ！ これで全てが可能だ！！ 僕  
の望みも！！ 世界が生まれ変わる時が来たんだ！！ 腐りきった

全てのポケモン達に今こそ思い知らせてやる!!!!!!」

奥に今蠢くポケモンが、一匹。

## 27 始まる（後書き）

ギラティナ…オイラが兄貴と共闘できるだなんて・・・感動ッス！！  
カガリ…泣くなよ・・・にしても、本当に凄いことが始まりそう  
だな。

ポエル…ライオなんて凄いものを発見しちゃったよ・・・

ライオ…うえっ！ 臭え！！ ハエがブンブン飛んでやがるぞ！！

けっこうグロかった今回orz

## 28 名前はまだ、無い。(前書き)

2か月ぶりの更新!! ww

アレン..先生ー? このヘタレ殴っていいか?

ちょっとやめてよ;

反省はしてるよ?

カガリ..だが後悔はしていない、だろ?

そのとおr (殴

アレン..スッキリした!

ポエル..それじゃあ28話、スタート!!

ちょ..台詞まで取られた(泣

## 28 名前はまだ、無い。

「えーと、目的地はここで合ってるのか？ カルラン君？」

「そのとーりで御座いますです！ 地点another1294x  
x3002！ 紛れもなく反転世界のど真ん中で御座いますです！」

白衣を纏った奇妙なポケモンと、その横の幼い少女のようなポケモンが、何やら会話をしている。

だが少女の方は言葉の扱いに慣れていないのか、微妙な話し方が特徴だった。

「ほほう・・・流石は地の神と恐れられただけはあるな。その0.005秒で割り出す世界把握能力・・・素晴らしい。」

「それは私のセリフで御座いますですよ？ 博士様は素晴らしいお方です！ 博士様のお蔭で身についた能力なんですから。」

白衣のポケモンが少女の頭をポンと撫で、少女は嬉しいのかクスリと笑う。

そこは反転世界だった。

緑の丘がいくつも宙に浮かんでいる。

それはまるで水面に映っている虚像と実像のように、左右対称によってになっており、現実ではまず見られない、菱形のような形をしていた。

丘がいくつも並ぶその間を、シャボン玉のような丸い物体が行きかっている。

更には奥の方に氷の柱も数本見えていた。

「さて、雑談は置いといて…、本題は解っているか？」

「奴等の妨害、及び奴等からのシャドーの保護、であってますです？」

「うむ、実にその通りだ。」

白衣のポケモンはそう呟くと、静かに身構える。

「『影分身』。」

「流石博士様です！ それでは私も早速攻撃を開始いたしますよ！  
『ダークシャウト』！！！！」

少女が口を開けた途端、黒い衝撃波が発生し、周囲の景色を破壊していく。



破壊された景色の中に、サンヨウシティの、シャボン玉、が存在していた事は、彼らはまだ知らない。

「！」

アレンたちが依頼書を見ていると、突然地面が揺れた。

「地震？」

幸いなことに揺れは弱いもので、すぐに収まった。  
安心してしていると、ギリティナが顔を上げ、遠くを見つめた。

『（まさかッスけど…先輩…？）』

「どうしたギラティナ？ 何かあったか？」

カガリが尋ねると、ギラティナは首を左右に激しく振り、笑顔を見せた。

『（兄貴に心配はかけられないな…）何でもないッス！ それより、さっきの地震なんスけど、もしかしたら…』

「心当たりでもあるの？」

ポエルが尋ねる。

『もしかしたら、スけど、オイラの世界の‘空間球’、同士の衝突による事故かも知れないッス』

「くうかんだま？」

「反転世界にはたくさんある、空間の保持のために存在しているものだ。オレ達がこうして存在しているのもその御蔭だ。絶対壊すなよ？」

『頼むッスよ、治すの結構大変なんスから…それじゃあ、任務始めましょう！』

「何だか難しいけど、楽しそうだね！」

「おう！私もワクワクしてきた！」

「お前ら、遊びじゃないんだぞ？ まあその調子で依頼もサクサク

こなしてくれよ…じゃあギリティナ、一発頼む。」

カガリは半分呆れて首を振った。

アレンとポエルはそのままギリティナの背中に駆け上がり、出発を急かしている。

『はいッス!』

ギリティナは大きな翼を羽ばたかせ、大空へ飛び立った。

先程、何かを感じた方向をちらりと見つめた。

『(先輩…)』

緑に包まれよく見えないが、フキヨセシティの辺りということを確認し、本題に戻る。

空に向かって特殊な‘竜の息吹’を吹くと、青紫に輝くトンネルが見えた。

「「おお!?!」」

アレンたちは初めての体験に興味津々のようだ。

そんな彼女らを見てギリティナは微笑み、任務開始の声を上げた。

『それではアナザーワールドへ! 3名様御案内ッス!』

同時刻 電気石の洞窟前

「此奴!! まだ生きてるぞ!!」

ライオは巨大なポケモンの呼吸音をしっかりと聞いた。  
そのポケモンの顔に走り寄り、叫んで起こそうと試みる。

「おい! しっかりしろ!!」

しかし反応はなかった。

「:チッ! 痛みで返事もできねえつかよ!! 俺が何とかしねえとな」

ポケモンには数か所に傷を負っていて、どれも急所を突かれたものだった。

ライオは中でも特に重症である腹部の傷を見つけ、その傷にやさしく手を置いた。

「『ウォーターリフレッシュ』!!」

両手から青い光と衝撃波が発生した。周囲の木々が激しく揺れる。同時にみるみるうちにポケモンの傷が回復していき、呼吸も安定してきた。

しかし、回復と同時にライオの顔が歪んだ。

たった数分で半径1メートル程の傷口が完全にふさがれた。

「ふう！ 御袋に教わった高等水系回復術がこんなところで役に立つとはな…。自己再生用なんだがまあ大丈夫だろう！ この調子ですべて回復させてやるぜ！」

ライオは休まずに術を続けた。

一つ、また一つと傷を治していく。

「これで最後だな…。『ウォーターリフレッシュ』！」

治していくうちに、地面が、いや、ポケモンの身体が動いた。

長い間行ったり来たりしたため、ここがポケモンの身体の上だという事を忘れていたのだ。

「ん…？」

「お、気付いたか！」

ライオは術を解除し、ポケモンから離れた。

「大丈夫か？」

「おお、そなたが我を助けてくださったのだな…？ まさしく命の恩人…！ 感謝しきれぬ思いだ。」

ポケモンはゆっくりと体を動かすと、二つの大きな翼を動かして見せた。

「いや、礼は要らねえよ。困ったときはお互い様、だろう？ ところで、お前何であんなことになってたんだ？」

ライオはポケモンを見上げた。

ライオの問いに、ポケモンは首を傾げ、呟いた。

「はて…思いだせぬ。」

「ショックで記憶を失ったのかもしれないな。」

暫く2人の間に沈黙が流れた。

「……。」

ただ単に相手が無口だったため起こった現象なのだが、ライオはプレッシャーと焦りを感じ、初対面の相手のために必死で思考回路を張り巡らせてみた。

（しまった…話が終わっちゃったぞ…ここは何とか俺が話を切り出すしかねえな…えーと、そうだ！）

「……ところで、お前、名前は？」

「名前は…無いな。」

「無い！？」

突然出た答えにライオは驚きを隠せなかった。  
というよりか、自分が懸命に考えて出した話題提示があっさり切り捨てられたショックが大きかった。

「ああ、でも、我を名前で呼んでくれる奴が一人いたな…。」

答えが出たので、ライオはすかさず突っ込む。

「その名前でいいから教えてくれ！」

「それが……思い出せんのだ。」

「え？」

ライオはとりあえず、このポケモンの名前でも付けてやろうかと思った。

一時間後      反転世界

『喧嘩売っとんかア！？      我エ？！』

「『バーンボルテックス爆雷！！』」

雷吉の電気エネルギーを纏ったアレンが、‘影分身’の集団に突っ込んでいく。

雷吉はあまりの数にウザったくなっているのか、苛立ち気味である。触れた瞬間に、影の集団は消えていくが、数は増えていくばかりできりがない。

「ギラティナ！      どういう事だ？」

『解らない…でも、依頼とは違う誰かが侵入しているのは間違いないッス！』



カガリが『ダークホール』を放ち、影を一掃した。

ギラティナは瞑想をしながら、‘空間球’の修復に集中している。

「『火炎ボンバー』!!!!」

ポエルは口から丸い炎の球を繰り出す。

それが敵の集団に近づくと、勢いよく爆発し、辺りの影が大量に吹っ飛んだ。

「にしてもこれ、ポケモンの姿してないよね？ 何でなの？」

ポケモンによる‘影分身’だということは確実なのだが、形は不定形で、棒のような体に手と足が生えているだけであった。

「特殊に加工してあるな……。波導の練り方が通常より少し加工してあるんだ。」

「そんな事、普通ならできませんよね？」

「ああ。なかなかのやり手だ。」

「それより！ 退治に集中するぞ！ 炎丸！」

『承知しました、アレン様。『クロスフレイム』!!!!』

『俺もやるわ!!! こいつら何かムカつくし!』  
『クロスサンダー』  
!!!

二つの技が合わさり、威力が2倍以上になった攻撃が炸裂した。

同時刻      ライモンシティ      リトルコート前

「こんな日に食べるイチゴ味のかき氷もまた♪格別だよね♪」

そういいながらベンチに座ってかき氷を一口一口大切に食べているのは、暗殺部隊第3班の隊長、勝利ポケモン、ビクティニのクレディアだ。

先程まではいい天気だったのに、曇りになり、雪が降り始めた。

通りがかかる人が驚いて横目で見ているのにも気づかずに、氷を美味しそうに食べ続けるクレディアの前に、突然一匹のポケモンが走り抜けた。

あまりのスピードで風が起こり、そのそれはクレディアの持っていた

かき氷を地面に叩き付けた。

「ああっ！？ 僕のかき氷が……！！ おい、お前、何てことしてくれるんだ……！！」

「？ 今急いでいるんだ。後にして……って、お前か、クレディア。」

走っていたのは、アブソルだった。どうやら知り合いらしい。

「なんだ、レイか……。何で急いでんの？」

「それは言えない。」

「じゃあ僕のかき氷、1350円分弁償して。」

「それかき氷だけの値段じゃないだろ……！！」

「テヘツ☆」

「B A K A。とにかく、俺は急いでるんだ。じゃあな。」

「ちえっ。面白くないの……。」

レイが走り去ろうとすると、目の前にポケモンが現れた。黒いフードをかぶっているので、種族が確認できない。

「ん？　すまないが避けてくれないか？」

レイは住民だと思って優しく話しかける。  
するとフードのポケモンは、口を開いた。

「貴方たち、シャドーの方。イエス？ノー？」

フードのポケモンは奇妙な言葉で疑問を提示した。

「は？」

「イエス〜！！よく解ったね♪」

クレディアの言葉を聞くと、フードのポケモンはピクリと反応する。  
フードの奥から、赤い2つの目がちらりと見えた。

（こいつ…敵！？）

（何だか強そうだねえ♪久々に楽しめそう！）

2人がそれぞれの思考をする中で、フードのポケモンは宣戦布告とでも言うように言った。

「奴等の支援。及びその妨害を成そう者の削除。それ、我らの目的。  
実行します。」



## 28 名前はまだ、無い。(後書き)

ライオ…今回新キャラ多いな〜

アレン…そのうちの片言キャラが多いよね；

意識したつもりはないよ

ポエル…にしても、いろんなところでイベントが同時進行だね

レイ…次回は俺たちのバトルだな…

クレディア…僕のバトルは初めてだよね！お楽しみにー♪

## 29 引き裂かれた兄妹（前書き）

お待ちせしました！今回はクレディア：メインかな？

クレディア…戦闘シーンもあるみたいだね♪

活躍が見られそうです！それでは第29話スタート！

クレディア…脱！モブ宣言！

え？

## 29

### 引き裂かれた兄妹

フードのポケモンがいきなり走って攻撃を仕掛けてくる。  
その時、フードが取れてポケモンの顔が覗いた。  
オレンジが鮮やかな身体、赤いリーゼントのような髪型、丸い頭・  
・・・。

「なっ!？」

「ズルズキン!？」

レイとクレディアは驚いた。  
相性が悪すぎる。

ズルズキンは悪・格闘タイプ。  
アブソルは悪タイプで格闘技に弱く、ビクティニはエスパーを持っているので悪タイプの攻撃に弱い。  
さらにズルズキンは岩タイプなどの技も覚えることが可能なため、ビクティニのもう一つのタイプ、炎の弱点まで突かれてしまうことが考えられる。

「俺狙いかよ!くそう!!」

ズルズキンはアブソルであるレイに真っ直ぐ突き進んでいった。  
拳を後ろに構えている姿から、パンチ系の技が来ることが予想できる。

レイはぎりぎりまで相手を近づけ、攻撃態勢を取った。



「舐めるなよ！『燕返し』！！！！」

レイは頭の角から白いカッター状の波導を飛ばした。

「飛行タイプの技だね…レイ、思ったよりやるじゃん！」

確かに飛行タイプの技がズルズキンに当たればかなりのダメージになる。  
しかし。

「『護る』。」

ズルズキンは両腕をクロスさせて結界を張り、攻撃を直に受け止めた。

「何っ！？」

ドガァン！

爆発が起こり、煙が発生する。視界が曇っている中、煙を突き破ってズルズキンが再び攻撃を仕掛けてきた。

「僕に任せろ！『大文字』！！」

クレディアが高熱の焰を吐く。  
相性は普通だが、攻撃力の高いクレディアの炎技は相手にかなりのの

ダメージを与えられるはずだ。

「（でも…手ごたえがまるで感じられないな…）」

クレディアは不安を覚えた。

「…！？」

炎の勢いが収まったにも関わらず、そこにズルズキンの姿は無かった。

「消え…ッ！？」

刹那、クレディアの背中に衝撃が走る。

宙に浮いていたクレディアが地面にたたき押されてしまう。

「クレディア！？？」

突然の事に、何が起こったのか解らないレイがクレディアのもとへ駆け寄った。

「『ドレインパンチ』。」

「うぐうつ！？？」

油断したレイの腹部にパンチが襲い、勢いで数メートル先の自販機に激突した。

起き上がろうとするが、あまりの痛みに力が抜けてしまう。

レイは、隙を見せた自分を激しく攻めた。

（シャドーともあろう俺が…こんな一撃を食らうなんて…。）

目にも止まらぬ速さで飛び込んできたズルズキン。

おまけに攻撃は明らかに急所を狙ったもの。<sup>クリーンヒット</sup>

本来どちらかと言えば防御型であるはずのポケモンに、ここまで即効性があるとは思ってもいなかった。

「ふーん……。『身代わり』だね、さっきの炎を回避した技は。おまけにその変り身制作に費やしたエネルギーは『ドレインパンチ』で補う。なかなかの作戦だ。」

「!! クレ、ディ……。ア！」

砂ぼこりの中から、影が揺らめく。

緊迫した空気の中、クレディアが不意に口を開いた。

レイは彼が立てるのを確認すると、安堵の息を漏らした。

彼は先程の不意打ちを受けたのにも関わらず、その体には傷一つ残っていないかった。

（クレディア：焼いた、な。）

クレディアはゆっくりとズルズキンに近づき、あと数メートルというところで歩みを止める。

「そんなに殺されたいのですか？ イエス？ ノー？」

「ハハ！ 安心してよ。仮にイエスと言ったとしても僕は死なないよ。」

ズルズキンはクレディアの言葉を聞くな否や、頭を彼の方へ向け、

構えた。

集中力がすべて頭部へ向けられ、エネルギーが白く光り始めた。

「……舐めてもらっちゃ困るね。」

次の瞬間、ズルズキンの身体が浮き上がる。

そう、まるで『サイコキネシス』でも仕掛けたかのように、その体は空間に固定されてしまった。

「……？」

完全に相手の思うがままになった状況にも関わらず、あくまで冷静を保つズルズキン。

「何が起こったのか、現在の状況に理解しかねます。そもそも私は悪種族、超能力など意味を成さない、それがこの世界の理です。しかしこの技は少なからず私の心身に影響を与えていることが考えられます。」

これは一体如何なる技術で御座いますか？」

「そんなことはないんじゃない？　というか、キミにもいい加減解つて欲しいんだけどな。」

クレディアが彼女を睨みつけたその目は、金色に輝いていた。

「その目、古より血系によって継がれる、創造の瞳」。イエス？ノ  
ー？」

「イエス。正解だよ。やっと解ってくれたね♪でも…」

まるでクイズごっこでもしているかのように、答えを出した相手に  
クレディアは無邪気に微笑む。

しかしその微笑は、彼にとって仮面のような物であった。  
少しずつ、その仮面から、素顔、を見せながら、クレディアは続け  
る。

「少し違うよ。この眼はね、血系だけじゃ使えない。相当な努力を  
しないと、使えないんだ。」

「クレディア…。」

レイはその様子を見て呟いた。

急に鳥肌が立ってきた。クレディアが何か仕掛ける、そうレイは感  
じ取った。

過去にも似たような出来事があったからだ。

クレディアには妹がいた。

名前はディーナ。種族はゾロア。

兄妹なのに似ていないのね、と周りからよく言われていたものだ。だが彼らはそのことを気にかけたことは全く無く、むしろお互いの良さとして受け止め合っていた。

二人は仲が良かった。そんな彼らの様子に、近所の噂も良いものになっていった。

ディーナは生まれつき身体が弱かったが、バトルセンスは抜群に良かった。

クレディアも、多様な技を使いこなす秀才と恐れられていた。

そして二人は、儀式に挑んだ。

‘創造の瞳’――――

彼らが受け継いだ力を完全に開花させるために。

あまりにも非道と言える数々の試練を乗り越え、彼らは神の力を手にする。

しかし、その力を欲する者たちがいた。

‘ケーヌリア教会’

奴等は、身体の弱いディーナに目を付けた。

「ディーナ――ッ!!!!!!」

「お兄ちゃ――――んッ!!!!!!」

二人は引き裂かれた。

「よくも…よくもディーナをツツ!!!!!!」

クレディアは奴等に攻撃を仕掛けた。

気が済むまで焼き払った。

その瞳の力で、「炎が最強」というルールを創り出して。

しかし、妹はすでに遠い場所につれさられてしまっていた。

「さっきね、見えたんだ。さっきまでフードを被ってたから解らなかったんだけどね。」

「……?」

風が砂埃を巻き上げていく。

「キミの額にある、そのマーク。ケーヌリア教会の、だよね?」

「……ッ!!」

ズルズキンの額には、確かに刻印がしてあった。

スペードの形をしたそれは、僅かに紫色に光って見えた。

「あの忌々しくて憎くて悪逆非道で利益ばかり求めてるあのケーヌ

リアの、だよなあ？」

「どうしてそれを…!？」

動揺を隠しきれないズルズキン。

「僕は、御前等だけは絶対に許せないんだ…だから…存分に、殺らせてくれないかな？」

クレディアの瞳が怪しげに輝く。

「止めろ！クレディア！それを使うとお前…!!」

レイが叫ぶ。彼の目に映るクレディアの背中から、徐々にエネルギーが立ち上っていく。

まるでそれは発煙筒のようでもあった。

「レイ。止めないでくれ。」

振り返ることなく呟くクレディア。

そして彼は今日、この場に「悪タイプにもエスパー技が通用する」というルールを創造した。

「今、楽にしてあげるよ。」

「ぐあああああああッ！?????」



哀れな断末魔が、町中に響いて行った…。

「あら、もうやられちゃったの？早いよねえ…。」

先程、クレディア達の戦いの跡が残る場所に、サーナイトとケツキングが居た。

二人の目線の先には、傷だらけになって意識を失ったズルズキンの姿。

「ゲゲゲゲ？ゴゴゴッ…？」

「うん。いいわよ。あなたが全部食<sup>スキャンシ</sup>べても。」

サーナイトは笑顔で答える。すると、ケッキングの方は物凄いスピードでズルズキンを食らい始めた。

血肉が碎ける、嫌な音がする。

「波導だけ食べればいいのに…コーギンったら、食いしん坊ねえ。……え？私にもくれるの？フフ。ありがとう。」

笑顔のまま、最早ズルズキンでは無くなったものに手を伸ばし、何の躊躇もなく波導を取り出すサーナイト。  
青白く輝くそれを、自分の心臓あたりに押し込み、体内に取り入れる。

「うん。なかなかいいスキャンだったわ。ありがとね、ゲーヌ。」

心臓に手を当て、そう呟いてから空を仰ぐ。

「にしてもあのビクティニには注意が必要ね♪これは総長にも伝えておかなければ…。」

「ゲルワワ…ゴゴッ。」

「そうねえ。確かに。奴等もそろそろ動き出してるからね。早めの対処が必要ね。」

彼女らは向きを変え、静かに歩き始めた。

額には、先ほどのズルズキンと同じマークが刻み込まれていた。

「グルルワ、ギギゴワ。」

「あら！いいこと言うじゃない。まあスキャンも奴等のアイデアだ

ったものね、感謝しないとね♪」

リトルコート、ビックスタジアムを過ぎ、テーマパークへと歩みを進める。

「そういえば奴…確かルーンだったかしら？ 奴の言っていたアレは、完成したのかしら？」

## 同時刻 竜螺旋の塔

「あい、へいと、ゆー。」

「一番初めに話した言葉がそれだなんて、悲しいなあ、アレン様。」

壊れた一枚の壁に、鎖でつながれている一体のリオル。  
そしてそれを楽しそうに眺める、ヌケニンのルーン。

「いいから、ここから、だして。」

「それは無理な話だよ、アレン様。貴方はまだ未完成なんだから。」

「いやだ、でたい、…だせ!!!!!!!!!!!!!!」

突然目を光らせるリオル。

すると、衝撃波が走り、塔の柱が粉々に砕けた。

「おっと。危ないな。むやみに力を使うと、持たなくなりますよ?」

「うるさい、……つかれた、ねむ……い……。」

リオルは静かに寝息を立て始めた。

「やれやれ。一発撃っただけでもう眠いか。これじゃあ戦闘もまだまだだな。とくに、あの少女を倒すにはな……。」

ルーンは静かに呟き、その場を離れた。

「おや? あちこちで煙が上がってる…ということは、始まっているのかな? 戦いが。」

塔の頂上から、イツシュ地方を眺めるルーン。

そこからは、いくつか煙が上がっており、まるで火事でも起こったかのような様子だ。

「そういえば、お手伝いさんが来るって聞いたな。まさかアレ? 早

いなあ、もう大暴れしちゃって。……でも……」

「抗争は…もう、始まってるよ。」

## 29 引き裂かれた兄妹（後書き）

ルーン…いや、忙しい感じだね

アレン様もついにお目覚めかな？ W

ルーン…いや、まだまだだよ。こんなんじゃ役に立たないだろうし。

対峙するのが楽しみだね

ルーン…まあそれは置いて、僕としてはお手伝いさんが気になるね。僕の期待通りだといいんだけど…

サーナイト…くしゅん。あら？くしゃみが…私、風邪気味なのかしら？

次回、アレン視点で行きます！

アレン…こっちはこっちで頑張ってるぞ！

### 30 真実は何処に？（前書き）

お久しぶりです！

アレン…やれやれ…もう突っ込む気も失せたな…

許してよ?! 今回はまあ事情とかあったんだし!

カガリ…それじゃあ白熱の30話、スタートだ!!

### 30 真実は何処に？

「おい、御前等いい加減気づかないのか。」

一向も減る気配を見せない影分身の攻撃を軽くかわしながら、ダークライのカガリは言った。

その声にアレンやポエルも手を止め、カガリを見た。

「どういう事？先生？」

「はあ、ま、まだ7級の御前等じゃ解るわけもないか…。」

カガリはがっくりを肩を落とし、迫ってきた一体をパンチで消滅させる。

「なッ！？そんな言い方は無いんじゃないか！??？」

そう叫びつつ、「おっと」と分身の攻撃を躲していくアレン。

『しかしアレン様、私にも少し気になることが御座います。』

レシラム…いや、炎丸が顔を少し曇らせた。

「炎丸は気が付いたみたいだな。」

「なんですか先生、もったいぶらないで教えてくださいよっ！」



ブースターのポエルは火炎放射で敵を一斉に蹴散らす。  
辺りに火花が散り、分身が消滅していったが、何処からかまた湧き  
出ている。

分身たちの攻撃に、気付けば身体も傷だらけになっていた。  
カガリはわずかに顔を顰める。

「長い話になるからな…『ダークチェーン』!!」

カガリは腕から影で作った鎖を飛ばし、分身たちに巻きつけた。

「これでしばらくは身動きが取れないだろう。」

アレンたちもカガリの方を向いた。周囲の沈黙を破り、カガリが事  
実を告げる。

「オレたちは今、幻術にかけられてる。」

アレンの動きが止まった。

「なん・・・だと・・・!?!」

「おそらくこの世界に入ってすぐだろうな。よく見てみる、ギラテ  
イナの姿が無い。奴は幻術にはかからなかったんだ。」

『そして、先程までここにいた雷吉の姿が見えません。』

「雷吉は目覚めたんだろうな、幻術から。」

アレンは反射的に辺りを見回した。確かにそこにはゼクロムの姿などなかった。

驚いて声も出ない。

「どうして…気付かなかったんだ…？」

「それが幻術だからさ。このままだと、オレ達は一生このまま戦い続けることになる。本体が無事な限りはな。」

「無事な限りって…殺されたりする可能性もあるってこと？」

ポエルが息をのんだ。

「ああ。あるいは人質に取られたりする。」

沈黙が下りた。

そんな中、アレンとポエルの心に一つの疑問が湧きあがった。

「「一体、だれが…！？？」」

カガリは顔を顰めた。

その瞬間、金属の音が響いた。

キーン！

分身が鎖をはじいた音だ。

「チッ。もう動き出したか。」

「一掃するぞ！『ダークホール』！！」

「了解だッ！炎丸！」

『承知いたしましたアレン様。』

「ファイナルフレア『爆炎』！！！！」

炎丸の炎を纏ったアレンが、そのまま分身たちへと接近する。  
刹那、周りの空間を巻き込む大爆発が起こった。

『アレン様、お疲れ様でございます。』

「ああ、ありがとう炎丸。」

炎丸は煙の中からアレンを乗せて出てきた。

『この中に、いらっしゃるんです。』

「？」

『私たちの中に、幻術を掛けた本人が化けて、混じっておられます。』

炎丸の言葉に、アレンは目を見開いた。

「なんだって…！…？？」

『カガリ様でもまだお気づきにならない御様子。…もつとも、彼がその本人なら話は別です。』

「……ッ！！」

『アレン様はわたくしとこうして合体技を使用することが可能でした。つまり、わたくしもアレン様も‘本物’という事…。つまり、カガリ様かポエル様、どちらかが犯人となります。』

炎丸はそのままカガリたちのもとへは戻らずに、上空をゆっくりと旋回し始めた。

「どうやったら見分けられるんだ…？」

『お二人を傷つけずに、見分けられる方法が一つだけ、御座います。』

炎丸はそう言い放ち、背中に乗るアレンを鋭く振り返る。

『アレン様は、【ヴォルフアクセル】という言葉をご存知ですか？』

同時刻

????

『お主、確か‘ポエル’とか言ったのう？』

「うん、そうだよ、僕はポエル。にしてもキミは凄いな、こんな状況でそんなにのんびりしてられるなんて。」

『何、心配いらん。やろうと思えばなんでもできる。どんな状況でも切り抜けてやるっつーのが、‘シャドー’って奴じゃろ？』

「その通りだよ。にしても、こんなことを知ったらアレンたちもさぞ驚くだろうね。」

「依頼主が本当の、真犯人、だったなんてね…」

「おい、アイス！　なんかずるずる集まってきたぞ！　何とかできねえのか？」

『うむ、我にお任せあれ。『氷柱連弾』！！！！』

ドンッ！

激しい音とともに、巨大な氷柱が落ちてきて、洞穴のポケモンたちを追い払った。

「おお！流石アイスだぜ。あっという間に道が出来た。」

『何、我殺生を好まぬ故、彼らの同意を得ようとしたただけだ。しかし恩人、』

「ん？なんだ？遠慮なく聞いてくれ。」

『アイス…という名前の由来は、如何に？』

「え？ああ、だって、御前の翼、何か氷みたいだし、さっき触ったとき冷たかったしな。」

アイスは、首を動かして自分の翼をしげしげと見つめた。

『いい名だ。昔の名前とは少々違うものだが、これもまた、いい味を出している。』

ライオはその言葉を聞くと笑った。



「だろ？」

『だが恩人。我らはそのんびりと過ごしている暇も無さそうだ。』

アイスは先程より声のトーンを下げた。

「ああ、そうみたいだな。さっきのポケモンもどうやら手下みたいだ。そうなんだろう？ その姉さんよお！」

「あら、気付いていらしたんですね。」

ライオが叫んだ先の巨大な、電気を帯びた石から、一匹のポケモンが現れた。

緑の頭と白いワンピースのような体の、サーナイトだ。

「カワイイブイゼルさん一匹：かと思いきや。後ろの大きなお方は奴等の‘獲物’じゃありませんか！ 奴らは阿呆な事に取り逃がしたのですね。私一人でも、お兄様がいなくてもここは突破できそうですわ。という訳で、そちらの方、私に頂戴な♪」

「アイスの事か？ ぜってえわたさねえよ！ それにお前、俺をカワイイブイゼル何てほざきやがったが、俺を舐めると痛い目に遭うぜ？」

ライオはアイスを護るように一步前へ歩み出た。

「まあ、小さな体で戦おうだなんて、ますます可愛らしい事♪でも、楽しませてくださるというのなら、話は別だわね。残酷な結末を見ることになるけれど、それでもいいのかしら？」

「それはこっちのセリフだッ！！！」

ライオは勢いよくサーナイトのもとへ走り出した。

同時刻      サンヨウシティの町外れ

（ん…ッ…ここは…？      どこなんスか…？）

ゆっくりと目を開ける。しかし目の前の光景があまりに衝撃的な物で、身体を動かしてもっとよく見ようとした。

身体が激痛に襲われる。よく見ると、自分は縄で縛られ、足や羽は動かせない状況だった。

しかし、そんなことはどうでもよかった。  
なんせ、目の前には。

（ポエル、さん…？？どうして……？うっ…）

次の瞬間、ギラティナは意識を失った。

見えたのは、

ポエルがゼクロムを縛り付け、痛めつけている光景だった。

### 30 真実は何処に？（後書き）

#### ■ 予告

「ホントはこんなことしたくなかったんだ」

「お兄ちゃん…」 「貴方は私に勝てないのよ！」

「御免…アイス…」

第31話、すれちがい

お楽しみに！

アレン…あと、アレン一周年記念もやるぞ！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0547p/>

---

爆炎爆雷のアレン！！

2011年12月3日10時53分発行